国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（2）

劉　玲

本稿では、中田祝夫編抄物大系（勉強社、一九七七年）所収の、国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』（影印本）を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、拙稿「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（1）」（『筑波日本語研究』第十七号）を参照されたい。本稿では、前稿に引き続き、主として、抄中に引かれた漢籍及び幻雲抄に集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、幻雲抄を解読する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については前稿に詳しいが、要点また前稿において説明していない事項について記しておく。

一　翻刻の範囲を底本の八一頁から一二二頁とする。

一　基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に置かれている抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込んだ小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所　が多いため、本稿では翻刻しない。

一　漢籍の引用が見られる場合、その書名、または篇目名や章節名に ═══ 線で記す。ただ、今回主として『国学宝典』網絡版（http://www.gxbd.com/）、「中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統」（http://hanji.sinica.edu.tw/）、『中国基本古籍庫』（黄山書社出版）を検索資料として使用することにし、一々原本で確認するに至っていない。中には、少数書名の誤記だろうと思われる箇所について、今回は特に対象としない。例えば、「禄山生日……裏禄山使宮人以綵輿舁之開元遺事」（八八17）において、「開元遺事」すなわち『開元天寶遺事』と記された箇所については、『開元天寶遺事』（中華書局、一九八五年）には見えず、『資治通鑑』（中華書局、一九五六年）巻二百一十六・唐紀三十二・玄宗天寶十載の節にはほぼ同文のものが確認できる。また、書名未記載だろうと思われる場合が若干見られるが、今回は対象としない。例えば、九七1～九七2にあるように、「字仲初」から「守以弟呼之」まで続く文について漢籍の書名が記されていないが、『唐才子傳校箋』（中華書局、一九八七年）にはほぼ同文のものが確認できる。なお、書名の誤記や未記載については、拙稿「『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」（筑波大学国　語国文学会『日本語と日本文学』55号）においても言及しており、参照されたい。

一　前記の検索資料に比べ、引用された漢籍の文章において、異文・誤脱・誤植などと思われる場合が多く見られるが、原

本で確認していないため、特に一々改めていない。

一　幻雲抄に集成している五山僧の諸家の僧名については　　線で記す。例えば「雪本　三体者……」（八三7）においては、「雪本」（蘭坡景茝）の横に　　線を引く。また、「村翁親聞双桂所語云　三体詩ハ……」（八五8）においては、「三体詩ハ」より以降は「村翁」（希世霊彦）が「双桂」（惟肖得岩）の説を引いていると見られるような箇所について、「村翁」並びに「双桂」の両方に　　線を引く。ただ、「行盡或云言禄山范陽へ行尽也」（九五7）にあるように、「或云」より以降は先人の説か集成者である幻雲らの説であろう場合が若干あるが、僧名が記されておらず、今回は特に対象としない。ほかに、「或曰」（一一一10）・「私案」（九八15）・「案」（九九10）と記された場合が若干あり、同様に処理する。

一　漢字については、底本の形態を重んじ、異体（略体・俗体を含む）の文字をそのまま写す（末尾「異体字一覧」に掲げる）。そのまま再現できない場合は通行体に改める。例えば、「天隱」（八一4）・「及各以勝日」（九九3）など。なお、一部誤読を招きやすい、または誤字と思われるものについては、【　】内において通行体の文字を（　）内に入れて記すことがある。また、若干□で示し、【　】内に「弱*攵」や「士+巴」のように示す場合があり、*印はその二字を右で組み合わせた文字を、+印はその二字を上下で組み合わせた文字を意味する。なお、初出以降は特に一々記さない。

一　仮名については、「子」を「ネ」に改める。また、合字では、「〆」を「シテ」に、「丁」を「コト」に改める。

一　踊り字については、漢字の場合は「々」に、仮名の場合は「ゝ」に統一する。なお、仮名二字以上の場合は、「シカシカ」のように繰り返して写す。

一　振り仮名、濁点は、そのまま写す。

一　返り点と一・二点は、それぞれ「レ」と[一][二]のように記す。

一　転倒符、書入れ指示、挿入符については再現できず、【　】内において説明する。

一　見せ消については■で示し、【　】内において説明することがある。

一　その他

・　頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。

・　句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、破損・墨汚れなどで判明できない場合、校注者の判断による。

・　破損や不鮮明であるため判読できない箇所について、□で示す。推測されるものがあれば、それを□の中に入れる。

・　その他の説明事項があれば、【　】に記す。

八一

増注唐賢絶句三體詩法卷之一　　以下華本

1　桃抄云　本古ニハ諸家集注唐詩三体家法ト外題アリ　古本

ニハ　五言ヲ　為第一　各有[レ]意也　五言ヲ　為首ハ【「本古」、「本」右上に挿入符あり、「古」右傍に転倒符ある。「古本」にすべき。】

2　詩之起　五言ハ　先ニシテ　七言ハ　次ナレハナリ　此新本ハ　絶句ヲ　為[二]巻之一[一]　此■本ニ　■絶句ヲ　為首者ハ　唐ヨリ以【「此■本」、「句」見せ消】【「■絶句」、「純」見せ消】

3　来絶句盛行于世　至宋元最甚サルホトニ　今此集ハ　元朝ニ　裴季昌カ　増注スルホトニ　當時盛ニ　用ル

4　者為[レ]先ソ　至天隠モ　元朝僧ナレトモ　古ヲ存シテ五言ヲ　編首ニ　スルソ　始周伯弼カ　集ル時モ　其心テ五言ヲ　始ニ

5　シタモノソ　天隠ハ　伯弼ニ随テ　編次スル也　季昌ハ新意ヲ　出シテ　編スル也　増注トハ　天隠ノ注シタ外ニ季昌カ

6　増注シタソ　此ニ　不審カ　アルソ　古註ニ　懇ニ　アル事カ　増注本ニ　ナイ事カ　アマタ　アルソ　其ハ　天隠ノ註ヲ　季昌カ

7　無益ト　思テ　削コトモ　アルヘシ　古今其例多シ　史記ノ索隠ハ　先ツ　注シ　正義ハ　後ニ　テキタソ　其後　索隠ト

8　正義トヲ　取合テ　索隠正義本トテ　盛ニ行ル、書アリ又嵯峨華蔵歟　宝積歟ニ　正義本トテ　正義ハカリ

9　アルソ　其ニハ　正義ノ注多シ　今ノ　索隠正義ニ　ナイ註カ多ソ　梅室ノ本ニハ　首書ニ　セラレタソ　索隠正義ヲ編

10　スル者削ソ　サルホトニ　今モ　是ハ　子細ナイソ　サテ増注ト　黒シテ　白字ニ　書タ下ノ註カ　古註ニ　アルコト多ソ　是【「古註」右傍に「天隠」】

11　ハ不審也　サリトモ　ヤワヤ　季昌カ　名ヲ　好テ　古註ヲ　増注ト　云テ　ヲクコトハ　アラシ

12　幻按　古本季昌集註　天隠増註也　季昌注多於新本所載天隠註少於新本所載也　新本天隠為

13　正　季昌為副也　又河南李泰着[二]巌子安次唐詩三体家法叙[一]云　汝陽周伯弼妙選編次　高安釈天

14　隠更加集注　東嘉裴季昌後為増註　経三大手其編次始備后也無惑焉　然則子安用新本乎【「后」「也」間に挿入指示あり、左傍に「必」。「后必也」にすべき。】

15　以此集序推之　天隠作註　在季昌之前也　蓋別人集天隠季昌注　作一編乎　故両本多増損也

16　唐賢ニ　村云　盛唐ハ　正体也　中唐ハ　正変相半也　晩唐皆変躰　而一点無正体也　此ニ集載[二]盛中晩唐詩ヲ[一]或謂之三体也

17　豫章張顕所着巌子安次唐詩三体家法詩序云　先ツ正ニ謂[二]唐詩ヲ[一]　須[レ][二]分[レ]等看[一]　蓋シ有[二]所謂　初唐盛唐【「豫章」右上に漢数字「一」】

18　晩唐者[一]也

19　虞集　唐音　詩序云　襄城楊伯謙好唐人詩　五言七言古詩律詩絶句　以[二]盛唐中唐晩唐[一]別[レ]之　凡幾巻謂之【「虞集」右上に漢数字「二」】

20 唐音 々也者 □之成文者也 可[二]以以観[一][レ]世矣 云々【□「十+巴」(声)】

八二

1 唐音云 自武徳(高祖年号)至天宝(玄宗)得[二]六十五人[一] 為[レ]唐初[一]盛唐詩 自天宝至元和(憲宗)間 通得[二]四十八人[一] 為[二]

2 中唐詩[一] 自元和至唐末 通得四十九人 為[二]晩唐詩[一] 々々多少巧 無[二]風騒気味[一] 私云百六十二人

3 或 玄宗以上為[二]盛唐[一] 玄宗以下為[レ]晩唐也 玄宗雖[レ]為[二]五十年太平主[一] 後求[レ]長生学[レ]仙 淫女色 □美人【□「宀+竜」(龍)】

4 故道衰政廃 禄山乱起 所以指[二]玄宗時[一]為[レ]晩唐也 幻謂 此説非也

5 賢者 美[二]詩人[一]之辞 非[レ]聖賢之賢[一]也 此三躰詩者 盛 中 晩 之詩人所作也 作者百六十二人也

6 絶句 其義不一也 或云 絶取[二]八句律詩之四句[一] 或云 絶妙句也 或云 四句不相連

7 詩法源流云 絶句者 截句也 後両句對者 截[二]律詩前四句[一] 云々 四句皆不對者 是截[二]前後四句[一] 雖正【「者 截律詩」、「者」「截」間に挿入符あり、右傍に「是」。「是截律詩」にすべき。】

8 変不変斉 而首尾布置亦四句 自起承轉合 未嘗不同條而共貫也 幻謂 文式所論絶句之義 同詩

9 法源流也

10 文式巻上 五言絶句 宜言絶而意■餘 七言絶句 宜意絶而言不足【「不」見せ消、右傍に「有」。「意有餘」にすべき。】

11 詩法源流云 絶句則當先得後二句 律詩則當先得中四句

12 截[二]絶八句律詩[一]之意者 取前四句 則絶句之後對詩也 若取後四句 則前對詩也 取[二]第一二[一] 取[二]第七八[一]

13 則常之 起承轉合之詩也 若又取肩對為絶句 則腰對 杜子美詩所謂 両箇黄鸝鳴翠柳 一【「取肩對」、「對」後に挿入符が二つあり、「腰」「對」二字右上に転倒符ある。「取肩對腰対為絶句」にすべき。】

14 行白鷺上青天 窓西嶺含千秋雪 門泊東呉万里船 是類乃全對詩也【「窓」「西」間に挿入符あり、「含」右傍に転倒符ある。「窓含西嶺」にすべき。】

15 或妙絶之義 木蛇同之 東坡二十五巻 其中絶句詩有三百餘首 雖然 第二十四巻別有絶句門 其数七八首也 然則絶

16 句之為詩者 難暁也 妙絶之処 如何弃之哉 詩家逸史云 絶妙之義也 豈絶句而已哉非也 豈以下非逸史之語乎【弃(棄)】

17 或云 四句不連之義 則毎句之意 不相接也 故曰絶句 云々 九淵同此義也 杜詩所謂 両个黄鸝鳴翠柳 云々 此一句々々

18 言別□ 不相連也 故云絶句也 然裏面ハ 意相接也 凡三義天下通義 以八句断絶之意為正也 詩法源流是【□「十+文」(事)】

19 為好也　翰墨全書甲集巻之一　杜子美集有絶句　絶最難工
惟晩唐与介甫五七言最為精絶　大抵句絶而
20 意亦絶者　為絶句　故杜集似此類　自題曰　絶句有題者
皆謂之小律

八三

1 三躰　或云　取毛詩三経三緯名之曰三体　云々　三経者
風雅頌也　三緯者　賦比興也　三経三緯合為毛詩六
2 義也　續翠云　序所謂　一詩之法　一句之法　一字之法
是為三体也　洲云　増註之始　有唐詩三躰詩
3 註綱目　云絶句体　云七言体　云五言体　然則三体謂之耳
4 村取此義　此説可也　幻按　續三体詩序云　續三体詩者
武略将軍饒州守鄉千戸高拱之所輯也
5 蓋自汶陽周伯弼選唐人五七言律　併七言絶句　為三体　千
載之下　往々讀之　使人所興起　云々
6 饒仲恭序
7 雪本　三体者　或以風雅頌之三配之　或以絶句五七言配之
或以一詩法一句法一字法配之　愚案　高[增]續三体詩序曰　汶
8 陽周伯弼選唐人五七言律　併七言絶句　為三体云　由是言
之　三体之義　昭然　又案　厳子安次唐詩三体家法叙
9 云　詩之音律　自三百編後　至唐寖盛　後世学詩者　多以
唐為法　先正唐詩須分等看　蓋有謂初唐盛唐【寖について、
八三6に書き入れ「寖浸同字　漬也　漸也　又漸進也」】【「盛
唐」右傍に某字がある】
10 晩唐者　汶陽周弼伯弱編選為三体家法　有四實　四虚　前
虚後實　前實後虚之体■■　是所謂披沙石【「也体」二字見せ
消】
11 而選金石者也　云々　拠此序　則以四實等似為三体也　私
云　次唐詩三体家法叙者　張顕伋書也　此外有李泰所書【「張」
左傍書き入れ指示あり、「豫章」とある。「書也」左傍書き入
れ指示あり、「永楽十六年三月三日」とある。「豫章張顕伋永
楽十六年三月三日書也」にすべき。】
12 之序　永楽十一年歳次癸卯　冬十月上澣丁丑抄　雪本
13 今周伯□集此詩之大意　宋南渡以後　詩道寖変　近於誹諧
雖如楊誠斎方秋崖者　皆承其弊也　秋崖【□「弓*夊」】
14 秋日伯云　秋日尋詩独自行　藕花香冷水風清　一凉轉覚詩
難作　付与梧桐夜雨声　又漁父詩　沽酒販来雪
15 満舩　一簑撑傍断磯邊　誰家庭院無梅者　不似江村欲暮天
雪本【「者」見せ消、右傍に「看」某字ある。「無梅看」にす
べき。】
16 誠斎秋詩云　一疊青松一疊烟　横舗平野有無間　真成万丈
鵝渓絹　畫出江西秋暁山　又凝露堂木犀詩云
17 夢騎白鳳上青空　径度銀河入月宮　身在廣寒香世界　覚来
簾外木犀風　聊欲革此弊　編此集
18 父曰周文璞　字晋仙　号野斎　見于中興江湖集　其子名弼
字伯弱　雪本
19 詩法　桃云　古本ニハ　三体家法トアルソ　家法ノ字ハ
周■カ　謙タル辞也　我集タル詩ヲ　推出テ　天下ノ法ニ
セウト　云イ【「弼」某字墨汚れ見せ消、右傍に「弼」。「周弼」
にすべき】

20 事ハ ヲソレ入タホトニ 我家ノ法ニ セウト云タ心ソ
云 古本ハ 家法ト出スホトニ 上ニ唐詩三体トアルソ 今
新本ニハ
21 三体詩法ト書スルホトニ 上唐詩トヲケ■ハ カシマシサ
ニ 唐賢ト 出タソ 季昌ハ 此集ヲ 編スルニ 謙シコト
ハ アラハヤ チヤ
22 ホトニ 詩法ト出タソ 天隠ハ 伯弱カ シタマヽ 註シ
タソ
23 桃抄云 又詩法ニ 有十躰 一ニハ 第一句ニ起ス 二ニ
ハ 第二句ニ起ス 三ニハ 第三句ニ起ス 伯弱カ家法 是
也 四ニハ 隔句

八四

1 對トテ 第一句テ 第三句ヲ 合セ 第二句テ 第四句ヲ
合ス 五ニハ 閑對躰トテ 第四句テ 始テ 題ヲ 作ルソ
六ニハ順
2 意体トテ 自第一句 至第四句 意ヲ スルリト 順随流
ニ クダス 七ニハ 蔵詠体トテ 雨ノ詩ヲ 作ルニ 雨ヲ
不言ソ【「随」右傍にヒ。「順流」にすべき。】
3 八ニハ 四句不連体トテ 毎句ニ 心別ナリ 九ニハ 中
断体トテ 両方二句ツヽ作 或ハ 別意トモ云ソ 十ニ 借
喩体
4 牡丹詩ヲ 作ルニ 花ヲ不言シテ 女ノ事ヲ 言ソ 海棠
詩ニ 貴妃ヲ 言ソ 絶句ニハ 先此十体ヨリ 外ハナシ
此ヲ 出
5 テハ 不詩也 此集絶句分百七十四首 此内ニ 以第三句
而起スハ 九十五首ソ 此ヲ 集ルニ 此十体ヲ 不出ソ
6 此十体ヲ 具タルヲ 集ソ 又一句ニ 又有十体 第一ニ
一句中有問荅 第二ニ 双對体 一句有對 第三ニ 上三下
7 三格 上三字下二字ヲ 云テ 中一字為虚字 第四 上應
下呼体 喩ヲ 上ニ 云テ タトエル物ヲ 下云ソ 第五
上
8 四下三 是ハ 今作ルニ 尤宜 上四字ト 下三字ト 別
ノ事ヲ 云テ 合シテ 句ヲ 作ルソ 金馬朝(テウヨリ) 回門似水 碧
鶏天遠
9 路如年 如此作ルソ 又山谷詩 家徒四壁書侵座 馬瘦三
山葉擁門 此モ 此躰ソ 第六ニ 上呼下應体トハ 一句
10 中テ 上ニ花ヲ 云テ 下ニ色ヲ 云ナリ 第七ニ 行雲
流水体 一句七字ヲ 上ヨリ マツスクニ云 春日鶯啼脩竹
裡
11 第八 錯綜体 紅稲啄残鸚鵡粒 第九ニ 理順言倒体トハ
言ハ サカシマレトモ 理ハ 順ニ 行ソ 寒岩四月【行頭
部に書き入れ「綜 機縷也 又持糸交 玉篇」とある】
12 始知春 四月ト云テ 春ヲ始メテ 知ルト云ハ 言倒シテ
寒岩トテ 山深キ処ナル程ニ 春カ 遅ク 来ルト云 理ハ
順ニ
13 行也 又此ヲハ 嶮語トモ云也 杜甫詩ニ 歌哭共在暁
是也 第十ニ 直書体ト云モ 十字一意体トモ 云也 一去
三年【「ト云モ」、「モ」右傍に転倒符あり、「トモ云」にすべき。】
14 終不面 七字ヲ 句ヲ ツクラス 有ノマヽノ事ヲ云也

上ノ行雲流水体ハ　句ヲ作ル也　一句法ハ　不[レ]出[二]此十体ヲ[一]　又曰一

15 字法ト云ハ　千変万化不可勝記

16 實接　幻謂　五言八句　四實評　周弼曰　謂四句皆景物而實　云々　四虚評　周弼曰　中句皆情思而虚也　云々　七言八句四實四虚等評　周弼【ここより以降は巻頭「實接」についての抄文で、原典は八六頁にある】

17 皆曰　其説在五言　云々　蓋周弼以五言為第一巻者　其證昭々　天隠反[二]周弼[一]　挙絶句為第一巻也【「周弼」右傍に「季昌歟」】

18 實謂景物　虚為情思　接者接花之接也　接紅花与白花　則其根同而其末異也　絶句第三轉処亦如此也　謂之若断而續也

19 風抄春耕云　語脈若断　而意路相續　或云断為第三句　續第四句【「春耕」右傍に「心田」】

20 暁風抄云　述風花雪月山川草木等實事　以接[二]上一一句[一]　上應[レ]之　下接[二]四句[一]　下應[レ]之　猶如[三]主人接[二]實客[一]　第三則主位

21 也　第一二与四句則客位也　幻謂　接花之意　為優

22 無婉曲　左伝序婉而成[レ]章　曲　従[二]義訓[一]

以示[二]大順[一]　云々　左伝成十三年　君子曰　春秋之称微而顕　志而晦婉成[レ]章　尽而不[レ]汙

八五

1 杜註　婉曲也　謂曲[二]屈其辞[一]　有[レ]所[レ]辟諱以示[二]大順[一]　而成[二]篇章[一]　又曰　謂直言其事

2 尽[二]其事實[一]　無所[二]汙曲[一]　桃云　無婉曲トハ心ヲ曲テ　不言シテ　率直ニ云ソ　異時ハ　指宋朝之辞也外振起――謂■詩之捻躰也　■外振起者　其風情辞【「謂■」、「詩」某字墨汚れ、見せ消】

3 語之新　而不尋常　■振起以催興也　其体平淡而安也　安者　帯ノ端ノ　タヽナワリタル也

4 安　韵會　果韻　安吐火切　安也　増韻　平也　帖也

5 外振起――外ハ　別ナヤウナレトモ　而内――内ハ　心カツヽク也

予以此義問岩栖翁□文明十一年九月二日也【□「山+旨」（時）】

此義ハ　聞講抄処　理誤也　率直ニシテ　有婉曲ハ唐詩ノ妙也　異時作ハ　不及唐者也

6 簣谷云　首尾率直――絶句ハ　自一句至四句　トツト透ルカ本也　婉曲ハ悪キ　曲ハ　様カマシキハ　非也　唐ノ絶句大抵如[レ]所[二]前言[一]　蓋異時ノ詩体ハ

7 不[レ]及[二]其唐ノ作者[一]

8 村翁　親聞双桂所語云　三体詩ハ　世間ニ　ハヤラカセトモ　ヘシテモ　不[レ]思也　村親聞続翠所語云　此集編々未必奇絶　唯載格備

9 者矣　村講　続翠云　趙瞻民者　就此集定詩格　蓋関東僧假設其名　不足為實

10 村云　捻編詩集者　巻頭巻尾之詩　合為一意　此集前載華清宮詩　末載繡嶺宮　猶唱開元太平曲之詩　言ハ華清

11 朝元玄宗栄華モ　昔物語ト　ナル也　是ハ　起尽ヲ　合ス

ル也

12 題下注 反書聞失色 失字上加中外二字 則可也 新唐書列伝百五十 禄山伝云 帝賜書為卿別治【ここより巻頭絶句「華清宮」詩についての抄である】

13 一湯 可會 十月朕待卿 華清宮 使至 禄山踞床曰 天子安穏否 乃送使者別館 使還 言曰 臣幾死 冬十二月天宝十四年 反[一]范陽[一] 凡七日反書聞 帝方有華清宮 中外失色 車駕还京師 下詔切責

14 禄山許自帰 禄山荅書慢甚 叵可忍 云々

15 若断而続――養云 問古夢宿 荅曰 第三句猶人ノ ホリヲコユル如ク 走リ飛ニスレハ 超也 一二ノ句テ 云イカケテ シタヅクリヲシテ【養云」は「問」右上にある】

16 第三句テ 転シテ 第四ノ句テ 可合也 前後相應トハ猶常山蛇勢者也 詩ハ江湖有水如寫碧天者也【「第三句テ 転シテ」、「テ」「転」間に挿入符あり、右傍に「ハタ」。「第三句テ ハタ転シテ」にすべき。】

17

八六～八七【原典テキスト「華清宮」詩が置かれている】

八八

1 華清 左思魏都賦 温泉毖涌而自浪 華清蕩[レ]邪而難[レ]老 注 刘曰 温水在廣平郡易縣 俗以治疾洗百【「毖」右傍に「音秘 口也 浩也 遠也」】【刘（劉）】

2 疾 華清 井華水也 済曰 毖 泌也 水急流皃 言温泉流而涌 自為波浪 言其華美而潔清 可[下]以蕩滌[二]疾病[二]而延[レ]壽【「泌」左傍書き入れ指示あり、八八4に小文字書きで「泌 晃 水俠流 又泉水貌 質勻 又至勻 魯考之」とある。】

3 木蛇云 凡水暁八時分 天地正氣在水 是曰井華也 故暁斟井水 煎薬飲之 此不老死之術也 是故玄

4 宗以水華之清 名湯浴之室 曰華清宮也

5 事文類聚前集十八巻 引辛氏三秦記曰 俗云 秦始皇至驪山与神女遊而忤其旨 神女唾之 遂瘡 始【「忤」左傍書き入れ指示あり、小文字書きで「逆也 違戻也 晃勻 魯考之」とある。】【「遂」「瘡」間に挿入符あり、右傍に「生」。「遂生瘡」にすべき。】

6 皇怖謝 神女為出湯泉而洗除 後人因以為験 養考

7 養案 玉海五十八注 會要云 天寶六載十月三日 改華清宮之名

8 案 唐書逆臣列傳一百五十云 安禄山営州柳城胡也 本姓康 母阿史徳為覡 居突厥中 禱子於軋牢山虜所【「覡」右傍書き入れ指示あり、小文字書きで「胡的反 女巫称也」】

9 謂闘戦神者 既而■妊 及生有光照穹廬 野獣尽鳴 望氣者言其祥 范陽節度使張仁愿遣搜廬帳【「姓」見せ消】

10 欲尽殺之 匿而免 母以神所命 遂命軋犖山 少孤随母嫁虜將安延偃 乃冒姓安 更名禄山 々晩益肥 腹緩

11 及膝 帝視其腹曰 胡腹中何有而大 答曰 唯赤心耳 毎乗驛入朝 半道必易馬号大夫換馬臺 天宝十

12 一歳 屢言禄山反 帝不信 是國忠疑隙已深建言追還朝以験厥状 禄山揣得其謀 乃馳入謁 帝【揣」について、八

八16に小文字書きで書き入れ「揣　玉云　初委　丁果切　度也」】

13 意遂安　凡國忠所陳無入者　十三歳　来謁華清宮　對帝泣曰　臣蕃人不識文字　陛下擢以不次　國忠必欲殺

14 臣以甘心　帝慰解之　詔還　帝御望春亭以餞　斥御服賜之

祿山大驚不自安　疾駈去　至淇門　輕艫循流

15 下　万夫挽絆而助　日三百里　既捻閑牧　因択良馬内范陽

冬十一月反　帝方在華清宮中外失色　車駕還

16 京師　云々　祿山明年正月　僭称雄武皇帝　國号燕

17 祿山生日　上及貴妃賜衣服宝器　酒饌其厚　後三日召祿山

入禁中　貴妃以錦綉為大襁褓　裹祿山使宮人以

18 綵輿舁之　開元遺事

19 容斎續筆第二　唐明皇兄弟五王　兄申王摠（イ）以開元十二年

寧王憲邠（ヒン）王守礼以二十九年　弟岐王範以二十四年　薛王業以

【「邠」右傍に小文字書きで書き入れ「補珉反」】

20 二十二薨　至天寶時　已無存者　楊太真以三載方入宮　而

元稹連昌宮詞云　百官隊伏避岐薛　楊氏諸姨

21 車闘風　李商隠詩云　夜半宴帰宮漏永　薛王沈醉壽王醒

皆失之也　凡首書有墨引点者　映雲老本所書也　下効之

22 古本　絶句外題云　諸家集注唐詩三体家法巻之三

23 巖子安次韻絶句外題云　次唐詩三体家法巻之三

東嘉　方輿勝覧九　瑞安府晋明帝分臨海郡五縣　立永嘉郡

隋改括（クワツ）州　唐初置東嘉州　又瑞安府　三郡

八九

1 永嘉東嘉東甌也

2 玉屑第二　唐初体唐初猶襲隋陣之体　盛唐体景雲以後　開元天宝諸公之詩　大暦体大暦十才子之詩　元和詩元白諸公　晩唐体【「隋」右上に挿入符、「陳」右上に顛倒符あり、「陳隋」にすべき。】

3 題下注　命陳湯中　幻按　太平廣記二■百三十六　引明

皇雑録云　玄宗幸華清宮　新廣湯　云々　安【「十」見せ消】

4 祿山於范陽以白玉石為魚龍鳧鴈　仍為石梁石蓮花以献　雕

鐫■巧妙　殆非人功　上大悦　命陳於湯中【「功」見せ消】

5 仍以石梁横亘湯上　而蓮華纔出於水際　上因幸華清宮　至

其所　解衣将入　而魚龍鳧鴈　皆若奮鱗拳

6 翼　状欲飛動　上甚恐　遂命撤去　而蓮華至今僅存　又嘗

於宮中置長湯数十間屋　環廻甃以文石　為銀

7 縷漆船　及白香木船　致於其中　至於楫棹　皆飾以珠玉

云々　又事文類聚前集十八巻　亦云命陳於湯中

8 題下注　更長湯　補云　不審也　漢書ニ　カワル長ト云事

アリ　更ハ　カワル也　長ハ　吏也　言ハ番ニ　ヲリテ　カ

ワリニテル者ノ

9 アフル　湯カ　十六所　アル歟　幻按　開元遺事作別更有

長湯十六所　又太平廣記作置長湯数十間

10 屋　無更字見于上

11 皇朝類苑巻第六十　故華宮在繡嶺之下　山半有[一]玉蘂峯

[一]　天聖　末（ノ）　予為[レ]学于山之嶺（ニ）[一]　所謂（ル）朝元閣者

峯【「華」「宮」間に挿入符あり、右傍に「清」とある。「華清宮」にすべき。】

12 側　有[レ]夾柱　作[二]王母之像（ヲ）[一]　雖[三]小有[二]損

腐之処[一] 而丹青未[二]甚暗昧[一] 其御階 甃以[レ]
蓮 花塼 千餘歩 則栽[二]一石柱[一] 々端有
13 [レ]孔 相傳云 開元天宝中 貫以[二]紅錦組[一]
宮女攀援 而上 慶暦中 再游詢 王母之像 失之已久
石柱孔已為庸道 焼為[レ]灰【「云」右傍某字ある】
14 而塗[レ]壁矣 嶺之陰 温泉湧流 嶺之南 有丹霞泉者
極寒冽 予嘗夏盥于彼 又曰 唐華清宮 今灵泉
15 觀也 七聖殿之西隅 十数歩間 有皂莢一株 合数人抱
枝幹頗瘁 相傳云 明皇洎貴妃共植[二]于此[一] 毎歳結實
16 必有[二]十数莢合歡者[一] 京兆尹命老卒数人守視之 移
接于他枝 則不復合歡也 華本
17 天宝六載 更温泉曰華清宮 湯治井為池 環山列宮室 地
理志 雪本
18 土於華清新廣一湯制度宏麗禄山於范【この行十数字すべて
見せ消】
19 東坡二十一之巻 送[二]陳睦知[二]潭州[一] 詩曰
華清縹緲 浮[レ]高棟 上有[三]纈林 蔵[二]石甕[一]
次公 注曰 福厳寺在南山半腹 石【「甕」右傍に「雍+缶」と見える字】
20 □谷有懸泉激石成臼 似□形 因以谷名 為石□寺 鄭愚
津陽門詩注曰 清陽門在華清宮之外闕 石【□「雍+缶」(甕)。以下二行において同様。】
21 □寺石魚岩下 有天然石 其形似□ 以貯飛泉 故玄宗以
石□為之寺名 僧於上層飛楼中 懸轆轤斜
22 引修綆 長二百餘丈 以及□泉 出於紅楼喬樹之杪 此所
謂纈林蔵石□也 又坡次句曰 白鹿泉頭山月出
23 寒光潑眼 如[レ]流[レ]汞ヲ 右養考之
24 長楊宮 史記司馬相如傳 注曰 正義曰 括地志云 秦長
楊宮在雍州盩厔縣南東二里 上起以宮内有長【「南」右上に挿入符あり、「東」右傍に顛倒符ある。「東南」にすべき】

九〇

1 楊樹 以為名
2 養案 漁隠叢話前集第七 蔡寛夫詩話云 安禄山之乱 哥
舒翰与賊将崔乾祐戦潼関 見黄旗
3 軍数百隊 官軍以為賊 々以為官軍 相持久之 忽不知所
在 是日昭陵奏 陵内前石馬皆汗流 子美【「昭陵」左傍に「唐太宗陵」】
4 詩所謂 玉衣晨自挙 鉄馬汗常趨 蓋記此事也
5 杜常 雪云 藤陰鎖細評杜曰 其詩若似唐 則不可必分唐
宋也 雖然他亦無益 所謂智者前有三尺暗也 然則伯弱誤載
此詩也
6 杜常 百川学海丁集中十一 孫公談圃下 杜常及第時 在
朝集処為公言 先夢已及弟 猶着白衣見主上 被
7 髪 常在衆中 騎馬 意欲先行 為前三人擁 而不得進
又過一大磵 幾墮 後得一人 状皃甚偉 扶掖而過
8 果第四人及第 則前有三人之應也 後一人乃沈季長 正如
[二]夢中所[一]見 時在[二]諒闇中[一] 即被髪之應也
9 中岩藤陰鎖細 至天隠三体詩注云 杜常宋人 列之於唐
必有拠 予曰 伯弱選集三体詩法 其意豈【「予」左傍に「中

岩」】

10 不欲鑿之不朽　必不可苟且而不考及此也　然亦以此詩　安之絶句之首　必有以也　豈可無復辨於其人之

11 為唐為宋而如此耶　以予言之　伯弱意者　在詩不在人　在躰不在時　嘗味杜常華清宮詩　深晩唐【「深得晩唐」にすべきか】

12 変風之体　故表而出之　以冠於一体之首　云々　杜常雖云宋人　其詩當係[一]唐之変風[一]也　且此詩　有涵

13 蓄不尽之意　而語帯騒韻　情景混融　其為躰誠不在晩唐作者之下　又云　以謂聽此閣上西風急

14 吹之声　正使人在彼長楊故宮寒雨蕭颯之中也　續翠論杜常者同鎖細之説

15 杜常　村菴云　伯弱トリマキラカイテ　杜常ヲ　唐人ト思テ　此集ニ入ソ　中岩論モ　無用也　キセイマテ也

16 雪樵云　渕隠叢話前集二十四　引西清詩話云　題華清宮一絶　行尽江南数十程　暁乗残月入華清　云々

17 乃杜常也　又武昌阻風一絶　江上春風留客舟　云々　乃方澤也　二人不以文藝■名世　而詩語驚人如此　殆不可【「多」見せ消】

18 知矣　然不謂之於宋人　而列之於唐人雑記中　蓋胡仔以為唐人乎　然如暁乗殘月　則入字亦可属杜常　由是

19 言之　非唐人而豈得入華清耶　雖然　案　山谷集　方澤有題南楼畫閣詩　山谷過之　次韵　又作詩寄之云　庾公風

20 流冷似鉄　誰其續之方公悦　以類推之　則杜常亦宋人不誣矣

21 雪云　天隠曰　新旧史及唐■諸家小説　並無杜常姓名　唯孫公談圃以杜常為宋人　西清詩話亦曰　世有才藻擅【「詩」見せ消】

22 名　而詞不工者　有不以文藝称　而語驚人者　如近傳華清宮一絶　乃杜常　武昌阻風　乃方澤也　按二説　則杜常方【「名」右傍に某字ある】

23 澤皆宋人　伯弱詩家学傳家　列之於唐必有拠　更俟博聞者定之　養案　新旧史以下履歴也【「詩家」、「家」右傍に「ヒ」。「詩学傳家」にすべき。】

九一

1 漢長楊宮　地理志　扶風盩厔縣有長楊宮　有射熊館　秦昭王起

2 黄図　長楊宮在盩厔縣東南三十里　本秦旧宮　漢修飾之以備行幸　宮中有垂楊蔭数畝　因以為

3 名　門曰射熊　秦漢游獵之所

4 行盡云々　雪樵本云　二句言明皇毎歳十月与貴妃同[レ]輦必幸[一]驪山[一]　故老杜詩云　君来必十月　樹[レ]羽臨[二]州[一]　有一時浴[二]赤日[一]【「州」「有」間に挿入符ある】【「老杜詩」右傍書き入れ「本集一　奉[レ]同[二]郭給事湯東灵湫作[一]】

5 光抱[二]空中　樓[一]　蓋其盛可[レ]能知焉　今僅言[レ]幸[レ]蜀則宮中荒涼　無[二]人往来[一]　唯有常時所[レ]玩風月之変　暁也　残也　其語乃

6 本于楽天想東遊五十韵詩之朝従紫禁帰　暮出青門去　莫道

城東陌　即是江南路　又刘禹錫和令狐相

7　公詩　莫道両京非遠別　春明門外即天涯之句　且行尽之盡字　与孟東野春風得意馬蹄疾　一日見尽長安

8　花之律　同也　或曰　江南詩家例為楊子江之南　今天隠注為蜀江之南　別有援拠乎　愚謂　東坡十云　莒蜀生蜀道

9　白芷来江南　次公注曰　江南謂楚澤也　蓋出蜀峽則楚也然則指蜀為江南　亦可歟　加之厳子安和三体詩　華清宮

10　和云　川前駐馬解郵程　暁浴温泉暖更清　川前亦豈非蜀哉

11　行尽云々　村菴曰　石門文集云　行尽湘西十里松　到門却立望諸峯　崇公遺迹無尋処　堦下春泥見虎蹤　由是言之

12　行尽字■属杜則可也　客有献李衛公以古木者　曰有異　公命剖之　作琵琶槽　自然其文成白鴿　予嘗語晁【「寓」見せ消】

13　次膺曰　公緑頭鴨琵琶詞　誠妙絶　蓋自暁風残月之後　始有移舩出塞之曲　云々

14　査住曰　當世講者文義非一也　以為乱前以為乱後　未知適从也　只杜之為唐人　為宋人之論一定　則極易辨矣　如天隠【「住」右傍に某字ある】

15　曰　江南指蜀江之南　則為乱後者無疑矣　而詩家称以為江南者　例皆楊子江之南也　称蜀者罕見焉　因

16　以楊子　解詩為乱前者　第二句入之字以為杜自入華清也然則杜之行達暁不息者何　是必有説　々已不顕

17　則詩乃不穏也　苟取天隠之解　以為乱後者稍□當矣　入之字系風月而可也　夫明皇播迁之后　空宮荒

18　凉　感慨尤深　於是乎常時風月皆変　作暁也　残也　寥落之景也　朝元閣者　明皇惑方士左説　祈神仙長生

19　道之処　華清之中　更上茲閣　想像明皇眷恋之情　則感又可益深　宜乎　更変作秋之景也　華清之為空宮　僅

20　余年　而則風月之為感　猶如斯其甚矣　況楊之久廃為墟乎感又可益深　向之暁風秋風　都変作一雨声者　必矣　都之【「況」「楊」間挿入符あり、右傍に「長」。「況長楊之久」にすべき。】

21　字　看詩者　當着眼焉

22　朝元云々　雪樵本云　二句言明皇感方士左説　祈神仙長生之術　而無其應　却有西風動兵氣　与向之暁風　倶入宮前長楊　而作【「感」右傍に「惑歟」】

23　雨声也　長楊　天隠云　樹也　厳子安和　十八楼臺無処所白楊風起作秋声　蓋長楊非殿可視　然厳子句本于城東

九二

1　隣多白楊　夜作雨声急之語　又虞伯生詩　無端繞屋長樹松尽把風声作雨声　抑亦師杜常者歟　或曰　西【「長」「樹」間に挿入符あり、「松」右傍に転倒符ある。「長松樹」にすべき。】

2　風作雨声　殆似不成律也　愚謂　易小畜卦曰　小畜亨密雲不雨自我西郊　程氏曰　長安西風而雨　終

3　未暁此理　須是自東自北而風　則雨　自南自西　則不雨何者　自東自北皆属陽　坎卦本陽　々唱而陰

4　和　故雨　自西自南　陰也　陰唱則陽不和　云々　易言密雲不雨自我西郊　言自西則是陰先唱也　故雲

5　雖密而不雨　今西風而雨　恐是山勢使然　云々　若由是則易解也

6 漁隱云　李義山華清宮詩云　華清恩幸古無倫　猶恐娥眉不勝人　未免被他褒女笑　只教天子

7 暫蒙塵　用事失躰　在當時非所宜言也　豈若崔魯華清宮詩云　■障掩金雞蓄禍機　翠環西【「隴」見せ消。右傍に「ヒ」。削るべき。】

8 掃蜀雲飛　珠簾一閉朝元閣　不見人帰見燕皈　語意既精深用事亦隱而顕也

9 東坡驪詩　六竜西幸峨眉棧　悲風便入華清院　又云　我上朝元春半老　満地落花無人掃　羯鼓楼高【「驪」「詩」間に挿入符あり、右傍に「山」。「驪山詩」にすべき。】

10 掛夕陽　長生殿古生青草

11 行尽　渊云　江南ノ水ハ　出蜀岷山而流入東海也　玄宗避禄山之乱　幸蜀之時　過此岷江之南　則華清已【「行尽」右傍に「幻本」】

12 荒凉矣　自驪山至蜀凡一萬里計也　今曰数十程　則太少然数者　一百之中　或五六十　或七八十也　数

13 十程乃謂数十日程也　桃云　数十程ハ　一日ニ　凡行コト六十里ト　定タコトソ　兵行ハ　三十里ト云ソ　卒忽

14 ニ　ケカセシトテソ　カウ定タレトモ　今詩ニ　用ル心ハ其マテモ　ナイ　只イカホトヽ　云心マテソ　十日許ノ　路ヲ　数十程

15 ト云ソ　云々　又ハ数十里ヲモ云ソ　松月云　数十程ハ玄宗出京江南ノ方ヘ　纔数十里　ユキユカサルニ　ハヤ跡ノ【「松月」右傍に「舜徒」】

16 華清ハ事サヒテ　暁風残而已　幻按　坡十六　過於海舶ニ得

[三]邁カヲ寄[二]書酒ヲ[一]　作詩　云々　因テ用[二]其韵ニ云々詩云

17 汝ハ如[二]黄犢[一]却走来　海濶山高百程送ル　蓋百程言百日程　然則数十程　数十日之義可也

18 蘭云　行盡　孟郊春風得意馬蹄疾　一日看尽長安花　尽字為義類之

19 村講云　第二句東坡第七　驪山詩云　六龍西幸峨眉棧　悲風便入華清院　与之相類

20 聽雨講云　言玄宗纔行尽　蜀江以南　今唯暁風残月　随意入華清也　如此之禍　因好仙術以作兵乱也　三四句謂之【「聽雨講」右傍に「心田」】

21 江南　蘭云　指蜀江亦無害　東坡第十　芎藭生蜀道　白芷来江南　注次公云　白芷移自江南　乃古所謂楚

22 澤多芳草者乎　■云々　蓋楚蜀相隣　故曰江南歟【「者」見せ消】

23 淵云　一義云　作者杜常カ　多年驪山宮ヲ　聞及テ　見タサニ　楊子江ノ南ヲ　数十程行尽シテ　驪山ヘ行ツイテ　見也　裴季昌

九三

1 江南春詩　題下注　指楊子江以南　与此義同也

2 村云　石門文集　有行尽湘西十里松　到門却立シテ数[レ]諸峯之詩　則杜常入華清之義亦可也　雖然　風月入【冒頭に「凸」印ある。九四4注を参照。】【「村云」右傍に「幻本」】

3 華清之義為優也　幻按　渊隱叢話前集二十四　西清詩話云

題華清宮一絶　行尽――暁乗残月入

4　華清云々　乃杜常也　又武昌阻風一絶云々　乃方澤也　云々――可知矣　幻謂　暁風　西清詩話作暁乗残月　則杜常入

5　華清之義　出于茲乎

6　幻又謂　韓翃回風暮雨ニ入銅鞮　杜牧暮烟秋雨ニ過[二]楓橋

[一]之詩　入字過字　雖有両義　人之入　人之過之義可也

7　此詩亦然乎　但行尽字　属玄宗　則入字言暁風残月而已

8　九渕　拠巖子安和三体詩之華清和韵詩　川前駐馬解郵程

暁浴温泉暖更清云々　川者蜀之三川

9　之川也　是故海棠ハ　蜀ノ花ナレハ　曰川紅　無悟克勤禅

師　蜀人ナレハ　曰川勤　由是觀之　江南ト云詩ノ

10　□韻ニ　川前トアルトキハ　此江南指蜀江　明矣　幻謂

以子安詩推之　則杜常行尽蜀江而入【「和」墨汚れ、右傍に「和」。「和韻」にすべき。】

11　華清也　雖然川中与華清相去甚遠矣　語勢不合也　子安詩

所謂川前者　言川原之類乎

12　朝元　渕云　ソレヲ云タレハ　随分ノ朝元閣トテ　老子ノ像

ヲ　置テ　信仰セラレシ　処モ　西風カ　マクリ　カケテ

吹入也　入

13　長楊作雨声云ハ　禄山兵ノ　西北ヨリ　打入ヲ　指也　今

ハ　仙術無験乎　朝元閣上ノ西風　ハルハル遠キ　昔ノ長

14　楊宮ノアリシ　辺エ　吹行テ　雨ニ　コソ　ナルラウト也

此三四句　天隠尽[レ]力註出也　此第三四句意　自昔至今

唐

15　朝ノ詩ノ幽微ニシテ　前後作者意思不及之妙処　有不尽之

味者也　其謂ハ　秦皇漢武治國家　服華

16　夷　如此太平　則只所顧之事長生也　故欲不見仙道　或使

徐福求薬於海上　或使王母献桃於宮中

17　皆竟死矣　唐玄宗モ五十年太平ナレハ　学仙道荒淫之術

殿名長生　閣名朝元　可謂不悟前車之覆

18　後車之戒　サテコソ　杜常カ詩ニ　秦宮モ漢殿モ　今ハナ

ケレトモ　秦漢ヲ　挙テ　始皇武帝トヲ　下ニカクシテ　玄

宗

19　モ　ヲトラヌ　二ノマイヨト　作ル　如此句面　字面　不

顕之妙処　非凡眼所見也　天隠雖浮図　天下無双　作者ニシ

テ

20　詩中ニ　含メル　幽微ナル意ヲ　註出也　伯弱深知此詩妙

置之唐詩第一番　然則天隠伯弱ハ　詩人亀鑑也

21　朝元閣三字　杜常深罪玄宗之字

九四

1　江南　村云　江南ハ　無尽ノ義アリトモ　楽天詩　朝自紫

禁帰　暮出青門去　莫道城東陌　即是江南【「リ」見せ消、右傍に「レ」。「アレトモ」にすべき。】

2　路　言ハ　若欲赴江南者　出門レハ　即江南路ナルヘキソ

聊尓ニテ云ソ

3　蘭云　唐音遺響　刘禹錫和令狐相公別牡丹詩　莫道両京非

遠別　春明門外即天涯　与楽詩同意也【「楽」「詩」間に挿入符あり、右傍に「天」。「楽天詩」にすべき。】

4　村講　一二句ハ　両義也　杜常行尽蜀江之南数十里　暁乗

残月之時　入華清ト云ニハ　用覚範十里之松之【「覚」右傍に「凸」印あり、九三2に同じく「凸」印ある。九三2～九四4すべて「幻本」に拠る意か。】

5　句　一義用坡驪山詩　言ハ　玄宗蜀江エ　落テ　萬里ノ蜀へ可行トテ　纔江南ノ数十里程ヲ　行キ過キ　タレハ

6　アトニ　アル　華清ハ　暁乗残月カ　入テ　サヒサヒトシタル也　三四句ハ　両義同モノ也　太平時冨貴華麗ナリシ朝元

7　閣ニモ　西風スサマシク　マクリ　カケテ　吹テ　其風カヤカテ　雨ヲ　将テ　長楊樹ヘ入テ　マツクラヤミニ　大雨ニナル也　西風

8　ハ　西北ノ風トテ　物スコク　殺気多キ也　シタノ心ハ求道術　造殿閣　驕レトモ　禄山カ　胡軍起テ　天下モ　マツクラヤ

9　ミニ　ナル也　朝元モ　長楊モ　胡軍乱入シテ　アサマシキ　体ト　云心也　可戒之　長楊ハ　未必宮ノ名　長ク列シテ　裁ヘナラ

10　フル　楊柳也　都ハ都合也　風合[レ]雨也　幻謂　村義ハ表裏共ニ　秦漢長楊宮ノ事ハ　云ワヌ也

11　抄　双桂ハ　長楊ハ　長ク　ウエナラヘタル　楊柳也　三四句　以所　自作詩合之云　九疑山上雨雲生　二女廉前

12　蕭瑟声　言ハ　九疑山上ニ　雨フリ　雲カ出ルカト見レハ二女廉前ハ　ハヤ雨声蕭瑟タリ

13　村講云　續翠云　暁風月残ニ　杜常入華清ノ心ニテ　暁乗残月ニ　入華清トハ　点ヲハ　ヨムマイ　テニハヲ　ツクレハ　キタナキソ【「風」「月」間に挿入符あり、「残」右傍に転倒符ある。「暁風残月」にすべき。】

14　村又云　一之句ハ　杜常ト玄宗トノ両義ナレトモ　杜常自蜀江至華清義可也　江南ハ蜀江南也　楊子江義不可也【「至華清義可也」、「也」右下に挿入指示あり、右傍書き入れ「幻云村菴前後之講有異　故有是非之両説」】

15　續翠　九渊ハ　玄宗行尽蜀江之南之義可也　ト云ソ

16　補云　杜常蜀人乎　不然頃在蜀江　今赴華清乎　唐詩鼓吹作暁乗残月可也　西風作西北風　而秋風也　粛殺気也

17　譬兵氣也　雨声　昏昧也　都入言暁風残月西風　尽入長楊作雨声也　長楊外言長楊樹　内言長楊宮也

18　巖子安和之云　十八楼臺無処所　白楊風起作秋声　由是観之　長楊謂樹也　蘭義同之　幻按　唐詩

19　鼓吹皆八句詩也　不載杜常詩者　可知焉　補説非也

20　長楊　趙瞻民義　虞伯生詩云　何処他年寄[レ]此生　山中江上捻関[レ]情　無[レ]端繞[レ]屋長松樹　尽取風声作雨声世

21　傳云　謗松氏執権者　盖擬杜常都入長楊作雨声之詩　則長楊亦指楊貴妃等歟　幻謂　未見實拠

九五

1　周易　小畜卦曰　小畜　亨（ハトヲリ）　密雲　不（シテ）[レ]雨　自（ス）[二]我（カ）西郊（ヨリ）　[一]　云々　程氏附録　長安（ハ）西風　而雨（ニシテ）（ル）　終未[レ]暁[二]此理（ヲ）[一]　須是

2　自[レ]東自北而風則雨（ル）　自[レ]南自[レ]西則不雨　何者

自[レ]東自[レ]北　皆属陽

3　坎卦　卦本陽　々唱而陰和故雨　自西自南陰也　陰唱而陽不■和　蟡蝀　詩云　朝済[二]于西[一]　崇[レ]朝其雨　是【■「秘」見せ消】【「詩」右傍に「毛詩」】

4　陽来唱也　故雨　蟡蝀在[レ]東　則其陰先唱也　莫[二]之敢指[一]者　非[レ]謂[二]手指[一]　莫[二]敢指陳[一]也　猶言不可道也　易言密雲不雨

5　自我西郊　言自西則陰先唱也　故雲雖■而不雨　今西風而雨　恐山勢使然　東北陽方　西南陰方【「蜜」見せ消、右傍に「密」。「密而不雨」にすべき。】

6　補云　引附録者談助耳

7　行盡　或云　言禄山范陽ヘ行尽也　騎駿馬　一日一夜　揮鞭疾驅行コト　七百里而至范陽謀反ヲ　起ス也

8　桃云　禄山行尽ト云義ノ時ハ　曲江ト可見歟　幻謂　此義非也　不足取也　桃云　此詩ニ　乱前ト云乱後ト云

9　義アリ　杜常カ　唐人テ　乱前ニ　行テ　入[二]華清[一]ハヤ唐ノ可乱ノ気象ヲ　ミタト■ソ　此ハ　詩ハ　面白レトモ　餘ニ【「ミ」見せ消、右傍に「云」。「ミタト云ソ」にすべき。】

10　ナニト　ヤラシタソ　已ニ　杜常ハ　宋ノ南渡已後ノ人也　都一字以言秦漢唐之三朝也　幻謂非歟

11　淵云　又禄山乱起　玄宗失国之詩ノ　不吉ナルヲハ　ナセニ　巻首ニ置ト云ニ　木蛇云　国ノ亡　天下ノ乱コトハ　無不女色也　故ニ

12　毛詩序云　言之者無罪　聞之者足以自戒云　此意ニテ　詩ト云コトハ　始ル也　玄宗淫女色　廢政道　失天下　是

13　後代人主之戒鑑也　想伯弱以此義置此詩於巻首歟

14　淵云　又此集為天下詩法　而壓巻之詩　有風字二　入字二何哉　或云　暁風残月　謂女色也　北磵辞州府啓云

15　謬将[二]槁木死灰之士[一]　誣以暁風残月之嘲　蓋北磵有不律虚名也　然則暁風有情也　西風無情也　字雖

16　重複　義則異也　入字　入華清者人也　入長楊者風也　其義別也　木蛇云　未必如此　蓋好詩雖複用二字

17　不害其義也　伯弱以之為法也　両个風字入字有其故乎　幻按　太平廣記百九十九巻　引雲

18　渓友議云　唐宣宗朝　進士陳玩等三人　應博学宏詞　所考定名第及詩賦論　上於延英殿詔

19　中書舎人李潘等　問曰　凡考試之中　重用字如何　潘對曰賦忌偏枯叢雑　論失褒貶是非　詩則縁題落韵

20　題縁如白雲起封中詩云　封中白雲起　是也　其間重用文字乃是庶幾　亦非有常例也　又曰　孰詩【「題」右上に挿入符あり、「縁」右上に顛倒符ある。「縁題」にすべき。】

21　重用字　對曰　銭起湘灵鼓瑟詩云　善撫雲和瑟　常聞帝子灵　馮夷空自舞　楚客不堪聴　逸

22　韵諧金石　清音發杳冥　蒼梧来怨慕　白芷動芳馨　流水傳湘浦　悲風過洞庭　曲終人不見　江上数峯

23　青　中有二不字　上曰　起銭雖重用字　他詩似不及起　雖謝眺云　洞庭張楽地　瀟湘帝子遊　雲去蒼梧遠　水还【「起」右上に挿入符あり、「銭」右上に顛倒符ある。「銭起」にすべき。】

九六

1　江漢流之篇　無以比也　其宏詞詩重用字者登科　起詩便付史選

2　幻謂　杜常重用風字入字　伯弱選之　冠於巻首　盖詩語佳則無害　亘攀錢起例　又坡集第一發廣

3　州詩　起句云　朝市日已遠　此身良自如　云々　結句云天涯未覚遠　処々各樵漁　刘須溪批云　首尾二遠字

4　何率也　幻謂　刘戒後生耳

5　暁風抄云　絶句中用同字者　凡十五　漁隠所謂律詩一格也

6　華清宮詩二風字二入字　黄陵廟詩二黄陵字　贈弾箏人詩二曲字　長溪秋思二溪字　寄人詩二春字　虚白堂詩二秋字

7　晴景詩二雨二花二葉字　送王永詩三水字　重贈商玲瓏二我辞字　伏翼西洞送人詩二

8　洞二花字　葉道士山房二不字　自遣詩二春字　宿石邑山中二山字　贈楊錬師二夜二経字

9　君山詩二湘字

10　唐詩正音　岑參春夢詩　洞房昨夜春風起　遥憶美人湘江水枕上片時春夢中　行尽江南数十里

11　東坡驪山詩　我上朝元春半老　満地落花無人掃

12　■壁産文所編乾坤清氣集　第五　以此華清宮為崔魯詩也

詩【■某字見せ消、左傍に「晏」某字か】【「宮」「為」間に挿入符あり、末尾「詩」右上に顛倒符ある。「華清宮詩」にすべき】

13　唐音遺響　杜常在崔道融之下　崔魯之上　盖作晩唐人也

14　明皇雑録　華清池中星沈香為山　効瀛洲

15　和云　川前駐馬解郵程　暁浴温泉暖更清　十八楼臺無處所白楊風起作秋声　古筠巖安子安口匂　魯考之

16　宮詞　注奇器云々　周礼第二　閽人喪服凶器不[レ]入[レ]宮　潜服賊器不入宮　奇服怪民不入宮【「閽人」右傍に「司門者」】

【ここより以降は次の王建「宮詞」詩の抄文が続く】

17　幻謂　上指玄宗　上指高宗非也　皇孫指玄宗

18　吒　毛旻禡韻　吒曲礼毋吒食　俗本作咤　々字注　嘖也　叱咤也　吒知加陟稼二切　玉

九七

1　雪本　王建字仲初　初遊韓吏部門墻　為忘年之友　与張籍厚　建性耽酒　放浪無拘　宮詞特妙前古　初【この行まで王建「宮詞」詩原典テキストが置かれている】

2　与枢密使王守澄有宗人之分　守以弟呼之　故多知禁掖事作宮詞百有四篇　逸者九篇　案愚漁隠叢【「守」「以」間に挿入符あり、左傍に「澄」。「守澄以」にすべき】【「案愚」は「愚案」にすべきか】

九八

1　話云　閲王建宮詞　世所膾炙数詞而已　其間襍以他人之詞如閑吹玉殿昭華管　醉折梨園縹蔕花　十

2　年一夢帰人世　絳縷猶封繫臂紗　此杜牧之也　涙満羅巾夢不成　夜深前殿按歌声　紅顔未老恩先

3 断　斜倚薫篭坐到明　此白楽天也　漁隠叢話前二十二曰
唐王建宮詞旧跋云　王建大和中為
4 陜州司馬　与韓愈張籍同時　而籍相友（トモト）善工（ヨシ）［二］為［レ］楽
府歌行［一］　思遠格幽　初為渭南尉　与宦者王守澄
5 有宗人之分　因過飲以相譏戯　守澄深憾曰　吾弟所作宮詞
禁掖深邃　何以知之　将［レ］奏劾［レ］建　以詩解之
6 曰　先朝行坐鎮相随　今上春宮見長時　脱下御衣偏得着
進来竜馬毎教騎　嘗承密旨還家少　独
7 奏辺情出殿遅　不是當家頻向説　九重争遣外人知　事遂寝
宮詞凡百絶　天下傳播　倣此躰者雖【「寝」右傍に「息也」】
8 有数家　而建為之祖耳　同曰　西清詩話云　欧陽永
叔皈田録言　王建宮詞多言唐宮中事　群書
9 闕紀者　往々見其詩　如内中数日無呼喚　傳得滕王蛺蝶図
云々　又建宮詞云　魚藻宮中鎖翠娥　先皇
10 行処不曾過　如今池底休鋪錦　菱角鷄頭積漸多　事見李石
開成承詔録　文宗論徳宗奢靡云　聞得禁中
11 老宮人　毎引流泉　先於池底鋪錦　則知建詩皆摭實　非鑿
空語也
12 語及漢桓灵信任中宮　起黨錮興廢之事　才子傳作不是
姓同親説向　九重争得外人知　渕隠前集廿二載之　与旧注同
13 補云　註　挹（クミハシ）注之器ハ　杓柄也　手ニトル　処アルソ
14 太平御覽七百七十三　應劭漢官儀曰　天子有五色安車　皆
駕四馬　又云　天子法駕所乗曰金根車　駕六龍
15 私案　史記三皇本紀曰　一説　三皇謂天皇　地皇　人皇
為三皇　云々　人皇九頭　乗雲車駕六羽出谷口　云々

16 金殿云々　雪云　二句言　凡為天子者　居天地之中　俾四
夷来朝　故貴其色　殿号黄金　車称黄屋　今則金殿
17 之上　架紫閣　不能無孟子所謂紅紫乱朱之嘆　蓋其紫閣也
案　廣記十七神仙傳云　■処士元蔵幾【「処」墨汚れ、見せ消】
18 隋大業九年　為過海使判官　風浪壊舩　蔵幾独為破木所載
殆経半月　忽達於洲嶋之間　洲人曰　此滄洲
19 去中国已数万里　乃出［二］菖蒲花桃花酒［一］飲之　而神氣
清爽　其洲方千里　花木常如二三月　所居　或金闕
20 銀臺玉楼紫閣　奏簫韶之樂　飲香露之醑　云々　明皇有意
于求仙　故構紫閣　制銅仙　舒掌捧盤【「醑」字について、九
八20に小文字書きで書き入れ「醑　相呂切　美酒　玉篇」】
21 以承雲表之露　和玉屑服之　非是道之所為道也　雪本
22 太平云々　雪本云　二句言神僧万回嘗識明皇以桑字　然而
求長生　而朝玄元避歩輦而乗雲車　豈不
23 愚哉　漢書貢禹傳　奏言　古者宮室有制　車輿器物皆不文
画　云々　況今車畫雲氣　實不為帝
24 而取者也

九九
1 註　郊祀云々　漢書郊祀志上曰　斉人少翁以方見上　々有
所幸李夫人　々々卒　少翁以方盖夜致夫人及竈鬼之兒
2 云　天子自帷中望見焉　乃拜少翁為文成将軍　賞賜甚多
以客礼々之　文成言　上　即欲与神通　宮屋被服
3 象神　々物不至　乃作畫雲氣車　及各以勝日　駕車辟悪鬼
注　服虔曰甲乙五行相克之日　如淳曰　如火勝金　用

4 丙丁日　不用庚申也

5 五雲云々　蘇舜欽字子美　長於歌詩　与梅聖俞齊名　世称蘇梅　徙居蘇州　買水石作滄浪亭　号滄浪

6 翁　後崔存遇王居山問曰　世傳　学士仙矣　曰瀛州有召遂飛去　作詩云　崑崙氣候四時春　紫府光陰夜

7 如暁　来時不用五雲車　跨着清風下蓬嶋

8 雪本云　金銅仙人　承露盤也　魏明帝景初元年　徙之洛陽盤折仙人泣下　亦重不可致　遂留覇城　李長吉歌為

9 明帝青竜元年■八月　又長吉記為元帝未詳【「元」見せ消】

10 案　漁隠叢話前集二十巻曰　細素雑記云　魏略曰　明帝景初元年　徙長安　鍾虚駱駝銅人承露【冒頭「案」真上に「△」印ある】

11 盤　々折　銅人重不可致　留于覇城　大發卒　鑄作銅人二號曰　翁仲列坐司徒門外　又漢晋春秋曰帝徙

12 盤　々折声聞数十里　金狄或泣　因留覇城　又唐李賀金銅仙人辭漢歌序云　魏明帝青龍九年八

13 月　詔宮官牽車　西取漢孝武捧露盤仙人欲立置前殿　宮官既拆盤　仙人臨載　乃潸然涙下

14 歌曰　茂陵刘郎秋風客　夜聞馬嘶曉無跡　云々　案　明帝紀青竜五年三月改為景初元年　是歳

15 徙長安銅人　重不可致　而李賀以謂青竜九年三月　蓋明帝以青竜五年三月改為景初元年

16 至三年而崩　則無青竜九年明矣　疑李誤也　酈元水経注云魏文帝黄初元年　徙咸陽始皇

17 所鑄金人十二　重不可致　因留覇城南　即与明帝所徙銅人事略同　竟未詳其旨　史記秦始皇二

18 十六年　有大人長五丈　足履六尺　皆夷狄服　凡十二人見于臨洮　是歳始皇初并六國　反喜以為瑞

19 銷天下兵器　作金人十二　以象之　後十四年而秦亡　又後漢薊子訓有神異之道　時有百歳翁　自説

20 為児童時　已見子訓賣薬於會稽市　顔色不異於今　後人復於長安東覇城見之　与一老翁共摩

21 娑銅人　相謂曰　適見鑄此而已　近五百歳矣　注秦始皇二十六年　収天下兵器　聚咸陽　金人十二鑄【「陽」「金」間に挿入符あり、「鑄」右傍に顛倒符ある。「鑄金人十二」にすべき。】

22 重各千石　置宮庭中　至此四百二十餘年　故東坡贈梁道人詩云　採薬壷公処々過　笑看金狄手

23 摩挲　又張天覚贈人詩云　鶴骨飄々紫府仙　摩挲金狄不知年　皆用此也　已上漢隠

24 金殿　渊云　金殿不必以黄金鑄之　以金箔彩之　猶北山鹿苑寺金閣之類也　幻謂　此説非也　言以黄飾之也

一〇〇

1 當頭ハ　譬如山門佛殿方丈ニ　マツウエニ　ツクリ　カサヌル也　或云　二階ニ　ツクル也　言ハ　金殿サエ　世ニスクレ　華麗ナルニ

2 又金殿ノ上ニ　當テ　紫■色ニ　彩シイタル　閣ヲ　ツクリ　カサ子タヨ　ソレヲ　ソレト云タレハ　閣上ニ　以「レ」銅鑄「レ」仙人　手令【「閣」某字書き掛け、見せ消】

3 鑿玉芙蓉 承[一]雲表曉露[一] 飲仙薬学長生術也

4 太平 玄元皇帝唐先祖李氏也 朝之以祈壽福 其躰ハ 車モ 非常車 馬モ非常馬也 五色車ヲ 如竜ノ

5 馬ニ ヒカセタソ 雲字映竜字也 此詩表面美[二]天下太平[一] 宮殿華麗[一] 裡面譏[三]不 [レ]務[レ]仁政 専好[二]豪奢[一]也

6 唐堯茆茨不剪 土階三尺 夏禹卑宮室而尽力乎溝洫 玄宗不蹈其轍 而好漢武秦皇所求之

7 神仙術 寔不可不亡之道也 金殿乃中央黄色 而天子象也 紫閣乃邪色 而少人象也 蓋紫奪朱之

8 謂也 言小人在天子上頭也 太平天子字 深罪玄宗 可謂 聞者足以戒也

9 紫閣 事文前集十八 白居易驪宮高詩 高々驪山上有宮 朱楼紫閣殿三四重

10 杜陽雑篇 元蔵幾隋大業中 為道海使 風浪壊船 為破木 所載 忽達於洲島 洲人曰 此蒼洲也 乃菖【隋(隋)】

11 蒲花桃花酒飲之 花木常如二三月 人多不死 衣[二]逢掖 衣[一] 載遠遊冠 所居或金闕銀臺 玉楼紫閣 奏

12 簫韶之樂 飲香露之醋 云々

13 太平廣記第二 彭祖傳云 又采女者 亦少得道 知養形之 方 年二百七十歳 視之如五六十 王奉事之於

14 掖庭 為立華屋紫閣飾以金玉 乃令采女乗輜軿 往問道於 彭祖也 云々

15 漢書列傳第四十二 貢禹傳云 奏(シテ) 言(サク) 古者宮室有制 宮女不過九人 秣馬不過八匹 墻塗而不[レ]稠 木摩(ハ)而 不[レ]

16 刻 車輿器物(ハ) 皆不文畫 苑囿不過数十里 云々

17 五色□車 桃云 其日装束コソ 華ヤカナレ 御車ハ 甲 日ニ メスニハ 畫[二]青色雲(ヲ) 丙日ニハ 赤色ノ雲車(ニ) メス 戊日【□「白+云」(雲)】【桃云 右傍に「天隠注同也」】

18 ニハ 黄色ノ雲車 庚日ニハ 白色ノ雲車 壬日ニハ 黒 色ノ雲車ニ 駕ソ 甲 丙 戊 庚 壬 ヲハ 五剛日ト云 乙 丁

19 巳 辛 癸ヲハ 五柔日ト云ソ 剛ハ 陽也 柔ハ 陰也

20 注 奇車 私按 玉海巻七十九 車服部 晋志記云 國君 不乗奇車 亦猟車也 古天子猟則乗木輅 後人代

21 以猟車 幻

22 村云 此篇借漢武譏玄宗

一〇一

1 朝元 淵云 朝元 或云元指天帝也 天上元辰 司下土人 民福壽之星也 玄宗今於紫閣 勧請天帝 祈

2 壽福也

3 太平天子 開元遺事云 開元々年 内中因雨過 地潤微裂 至夜有光 宿衛者記其処所 暁乃奏之 上令

4 鑿其地 得宝玉一片 如拍板様 上有古篆 天下太平字 百僚称駕賀 収之内庫 【「駕」見せ消】

5 宮詞注 杜元凱云々 左傳序云 盡而(コトヒテニシテ) 不汙(ケカ) 直書其事 具(ソナフサリテ) [レ]其文 見(ヲシンス)[レ]意 云々 【宮詞 右傍に某字ある】

【「具其文見意」、「其」左傍に「ヒ」とある。「具文見意」にす

べき。】

6 文選第七揚子雲甘泉賦曰　於是乗輿廼登〔二〕夫鳳皇兮而翳〔一〕華芝〔一〕　善曰韋昭曰　鳳皇為車飾也【鳳皇（鳳凰）】

7 翳隠也　服虔曰　華芝蓋也　以華蓋自翳也　済曰　乗輿天子也　鳳皇車名　翳隠也　華蓋名

8 駟〔一〕蒼螭〔一〕兮六〔一〕素虬〔一〕　向曰駟駕也　蒼螭蒼竜也　素虬白竜也　凡称竜者　皆馬也　言竜者美之也

9 巌安和無也【「巌安」は「厳子安」にすべきか】

10 漁隠叢話巻第二十【ここより以降「呉姫」詩の抄文が続く】

11 能　奴登切　獣名　熊屬　足似麈鹿　絶有力　故有絶人之才者　謂之能　々奴来切　三足鼈也　今

12 於来字韵中用　法士多瓊能　乃是僧似鼈耳　然魏晋人作詩多如此借韵　至李

13 杜韓退之　無復此病耳　已上魯也考之

14 前頭　東坡廿巻　次韻孫莘老見贈云々　羅趙前頭且眩書

注厚曰　晋衛臣傳　羅叔景趙元闕与張伯英並

15 時　見称　故伯英自称上比崔杜不足　下方羅趙有餘　次公曰　刘禹錫沉舟側千帆過　病樹前頭万木春【「沉舟側千帆過」は「沉舟側畔千帆過」にすべき】

16 右魯也　所考如此　厚注之意　不足有餘之語勢　并刘詩挙句之意　前進之謂乎

一〇三

1 呉姫　村云　呉姫凡言美人耳　呉越之間　多美人　姫者女捻名也【この行まで薛能「呉姫」詩原典テキストが置かれている】

2 薛能　風抄　新唐書百二十六文藝傳中列薛能名而已　不見本傳　胡三省通鑑二百廿巻　唐懿宗

3 紀云　薛能汾州人也　音義　能棠莱切　愚案　才子傳　能字太拙　由視之　似才能之能　又按唐書一百【「由」「視」間に挿入符あり、右傍に「是」。「由是視之」にすべき。】

4 題注　薛許昌　十九史略　三國部　魏主治許昌注　邑属許州

一〇四

1 二十六文藝傳云　若應物薛能鄭谷等　班々有文　在人間史家逸其行事　故弗得而述云　才子傳曰【行頭「二」右上に「十」印あり、一〇三3行末「百」左下に同じく「十」印ある。一〇四1が一〇三3後に続くべき。】【「若」「應」間に挿入符あり、右傍に「韋」とある。「韋應物」にすべき。】

2 能癖於詩　日賦一章　為課　性喜凌人　格律旦々　亦無甚高論　嘗以第一流自居　又詩林刘后村云【「旦」左傍より書き入れ、「雪本」毛詩五　呢詩　総角之宴　言咲　晏々　信誓旦々　注　旦々猶怛々　然言懇惻欵誠」とある】【刘（劉）】

3 薛能詩格不甚高　而自称誉大過

4 六氏李賀　柳花偏打内家香　註　呉正子曰　内家　宮嬪也　唐中使押領〔二〕内家三千人〔一〕

5 自是　渕云　凡秦漢以来六朝文選詩等　皆称有才徳之人曰玉人　佳人也　自是二字妙也　言雖以脂粉不粧

6 飾　其顔色天然美麗也　三千人中　呉姫有第一名也　内家言内裏　或言宮女

7 春耕云　凡三千女　備女工也　蓋百官賜衣　故多宮女也　第二句　与黙義同　私云　未必為女工　幻【「春耕」右傍に「心田」】【「春耕」真上に「十」印ある。一〇四16注を参照】

8 化生　楊誠斎江東集第二　謝余処恭送七夕酒果密化生児詩云　巧楼後夜邀[レ]牛女　留[レ]鑰今朝送

9 [レ]化生　方輿第一　摩睺羅平江第二郡志　土人於[レ]泥塑　所[レ]造　摩睺羅　尤為[クリ]　[レ]精巧

10 幻案　易咸卦[カン]　彖辞　天地感而萬物化生[ス]　王弼注　二氣相与[テ]　乃化生[ス]　正義曰　天地ノ二氣　若不感應相【二氣】右傍に「陰陽」】

11 与　則万物無[レ]由[二]得[レ]変化而生[一]　又繫辞上生々　謂之易　韓康伯注　陰陽轉易[テ]　以成[二]化生[ヲ][一]　正義曰　生々　不

12 絶之辞　云々　前後之生　変化改易　云々　又繫辞下　男女構精[ヌル]　万物化生[ス]　正義曰　構　合也　言男女陰陽相感任其自

13 然　得一之性　故合其精　則万物化生也　幻謂　化生取易之義　注引金剛経非歟

14 松翁云　第二句　如前義　則与第一句重複　然則内家――ハ宮中女モ　皆ソレソレノ　一黨アルヲ云也　言其部類ノ【松翁」右傍に「舜徒」】

15 中テモ　トリワケテ　独キカト　第一美人ニ　見ユル也　幻謂　如褚裒[ホウ]知孟嘉也　黙義亦同也　第一第二句　言ハ　大衆中ニテ【「同」「也」間に「之」。「同之也」にすべき。】

16 ウツクシク　ミユルハ　小座敷ニテ　ワルイカ　呉姫ハ内家叢裏ノ　五十人ノ　會ノ時モ　分明ニ　ウツクシク　見ユル也【「五」「十」間に挿入符あり、右傍に「人」。「五人十人」にすべき。】【「見ユル也」真下に「十」印ある。一〇四7行頭に同じく「十」印ある。「幻」（一〇四7）「幻案」（一〇四10）「幻謂」（一〇四13、一〇四15）などが見え、一〇四7～16は幻雲の説から引く意か。】

17 杜詩　独樹花開自分明

18 芙蓉――凡三元日　以正月十五日為上元　七月十五日為中元　十月十五日為下元　皆天神刑邪賞善之辰也　雖然

19 弄化生者　七夕也　今日中元何哉　七夕与十五日　相去不遠　故中元日用七夕故事　亦無害也　天子寵之　雖置芙

20 蓉殿未能誕太子　空弄摩睺羅児　禱之而已　然則色衰之後寵亦可衰　必矣　悲哉　言辞能有天下

21 第一才名　未能大用　纔作武官　怨情隠然言外　含蓄不尽之意

22 黙云　芙蓉殿　怨女所居也　一二句言大可承寵　三四句言　却無寵　開闔妙也

23 ■化生　補云　或云　俗摩睺羅　禱之於牛女　蓋七夕也　詩意自七夕弄之　不覚到中元也　蘭云　始於七夕　満散於中元也【某字見せ消、右傍に「弄」。「弄化生」にすべき。】

一〇五

1 村云　用七夕故事於中元　蓋大数也　七月中ト云ワンマテ

也　淵同之　風抄梅謂　弄蠟児者　七夕也　用之於十五日者
其
2　間九日也　九則陽数也　祝禱皇太子之誕産　有故哉　幻謂
穿鑿
3　東漸云　三千女自漢武帝元帝始焉　盖立明光殿置燕趙美女
三千人也
4　風抄云　自是与自是桃花貪結子同　自即自負也　与独字應
也
5　村講云　空華説以自是二字作一篇　趙瞻民所謂　一意格乎
此説未必然【「空華」右傍に「義堂」】
6　信仲云　拍者水拍天也　言水満器也　化生　彼物化為此物
也　村云　三四句言寵ノ少シアル時ハ　□可誕太子ト【某字
右傍に「曾」。「曾可誕太子」にすべき。】
7　テ　祝シテ　祈シモノヲト　云心ソ　幻
8　幻謂　村義与天隠註同　三四句亦謂才寵日也　言外有今日
寵衰之嘆
9　三元　世所謂上中下三元也　注　正修真上日要云　上元乃
正月十五日　天地水三官朝天　十天灵官　神仙兵馬与上
10　聖高真人　同降人間　考定罪福　中元乃七月十五日　地官
下降　九地灵官　神仙兵馬　名山洞府神仙兵
11　馬　下人間　校定罪福　下元乃十■月十五日　九江水帝十
二河源　溪谷大神■　賜谷神王　水府灵官同下人間【「十■」、
「五」見せ消】【「大神■」、「三」見せ消】
12　校定罪福　雪本
13　唐詩四十八　有呉姫詩十首　其一云　楼臺重疊満天雲　殷
々鳴鼉世上□　此月楊花初似雪　女児絲管【「唐」右傍に「雪
本」】【□「米+耳」（聞）】
14　弄參軍　復斎謾録云　本朝景徳三年　張景以交通曹人趙陳
斥為房州參軍　景為屋壁記　署曰
15　近制州縣參軍無員数　無戢守　悉以曠官敗事　違戻政教者
為之　凡朔望饗宴　使与焉　至於倡優【戢（職）】
16　為戯　亦假而為之　以資玩戯　余按楽府雑録戯弄參軍　始
自漢■■■■■有［レ］贓犯和帝惜其才　免【「舘陶令石聘」五
字見せ消】
17　罪　毎宴楽　令白衣夾衫　命優伶弄戯　辱之　経年乃放
後為參軍　然則戯弄參軍自漢已然矣　云々　愚案【「令」「白」
間に挿入符あり、「衣」右傍に顛倒符ある。「令衣白夾衫」に
すべき。】
18　謂以此詩可□本集詩　寓不遇之意也　盖■意謂　姫於
三千之内　其名為第一　故一顧傾城　再顧傾國　然【□「山+
乃」（會）】【■「言*乏」】
19　君主飄忽之意　難以固其寵　於是不能歉（ケン）焉　若得一子任其
位　則恩幸有始終矣　為之弄化生　以為宜子祥【「歉」字左傍
書き入れ、「玉篇口簟反　恨不出也」とある。】【「有」「始」間
に挿入符あり、「終」右上に転倒符ある。「有終始」にすべき。】
20　通考百四十七丁有弄參軍戯如右作　陶令石聘■■■■■■■
同趙書謂石勒參可為舘陶令　如此豈傳聞列之誤耶　通考【「可
為」右傍に「周延」】【冒頭より「舘陶令」まで見せ消か】
21　和三体云　國色傾城玷玉名　遠山眉黛淡粧明　清歌一曲晴
雲駐　舞袖風回百媚生　雪本

22 ■■百四十七　參軍戲　楽府雜録述　弄參軍之戲自後漢館陶令石聘有贓犯始也　和■云々【■■「通考」某二字見せ消】【「和■」二字見せ消】

23 同六行　趙書謂石勒參軍周延為舘陶令　如此豈傳聞之誤邪　通考　石耽作石聘　而已

一〇六

1 揣摩　毛晃果韻　揣音朶　度高曰揣　又凡称量忖度　皆曰揣【この行までに原典「已上共三首」の段落が続く】

2 史記列傳第九　蘇秦傳云　於是得［一］周書　陰符［一］伏而讀之　期年　以出［二］揣摩［一］　注　戰国策曰　乃發［レ］書陳

3 ［レ］篋数十　得［二］太公陰符之謀［一］　伏而誦［レ］之簡練　以為［レ］揣摩　云々　期年　揣摩成　鬼■谷子有揣摩篇也【「双」見せ消】

4 索隠曰　戰国策云　得太公陰符之謀　則陰符是太公兵法揣音初委切　摩音姥何■反　又王劭云【「切」見せ消】

5 揣情摩意　鬼谷子二章名　非為一篇也　高誘云　揣是定也　摩是合也

6 養按　史記蘇秦傳　於是得――注　戰国云々　索隠云々鄒誕本作揣霏　々讀亦為摩　高誘曰　定諸侯使

7 讎其術　以成六国之從也　江邃曰　揣人主之情　摩而近之其當矣意　正義曰　鬼谷子有揣及摩二篇【「其」「當」間に挿入符あり、「意」右傍に顛倒符ある。「其意當矣」にすべき。】

8 言揣諸侯之情　以其所欲　切摩為揣之術也

9 称亭　村云　韵會　亭子注　前張湯傳　平亭疑法　師古曰亭　均也　調也　又停字注　本作亭【「子」右傍に「字歟」】【「前」　「張」間右傍に「漢」。「前漢張」にすべき。】

10 称停　或云　権衡量物之軽重也　毛韻称字注　称亦作秤

11 補云　称ハ　ハカル也　停ハ　ヒトシムル也言行録　刘安世傳云　呂宝臣尤善［二］称停事［一］　毎［二］事之来［一］　心称［二］停軽重［一］　令得所而后已也

12 注早負――大恵普説云　其抱聡俊　負才能者　快廣韻情不足也　若干　弘決一云　若　如也　干　数也

13 韻會　忽字注　一蚕為一忽　十忽為一糸

一〇七

1 歸鴈　按　困学紀聞第五云　時訓月令七十二候　凡鴈四見孟春鴻鴈来　夏小正曰　鴈北　郷　呂氏春秋淮南子時【「来」左傍に「カエル」】【この行までに銭起「歸鴈」詩原典テキストが置かれている】

2 則訓曰　候鴈北　注月令注　今月令　鴻皆為候　而不言北蓋来字本於北字也　康成時猶未誤　故曰鴈自南方

3 来　将北反［二］其居［一］　其後傳寫者　仲春鴻鴈来　誤以北為来　由是視之　孟春鴻来　當作孟春鴻鴈北也　此題

4 亦謂春初北帰鴈也

5 鴈四見者　養按　月令　孟春之下曰　鴻鴈来　陳注　此記寅月之候　来自南而北　仲秋之月鴻鴈来　陳注曰　此記西【「陳注曰」、「注」右傍に「ヒ」。「陳曰」にすべき。】

6 月之候　孟春言鴻鴈来　自而来北也　此言来自北而来南也
季秋之月鴻雁来賓　陳曰　鴈以仲秋先至者為主
7 季秋後至者為賓　季冬之月應鴈北郷　去声
8 銭起　新唐書無傳　起子徽　在新唐書列傳　百二十巻
9 才子傳　銭起字仲文呉興人　天宝十年　李巨卿榜　及弟
少　聡敏　承[二]郷曲之誉[一]　初従[レ]計吏　至[二]京口
客舎[一]　月夜閑歩
10 聞戸外有[二]行吟声[一]　哦曰　曲終人不見　江上数峯青
凡再三往来　起遽従[レ]之　無所見矣　嘗怪之　及就[レ]
試　[二]粉闈（二）闈[一]【「遽」左傍に「ニハカニ」】
11 詩題乃湘灵鼓[レ]瑟　起輟就　即以鬼謡十字為[レ]落
句　主文李暐深嘉美　擊[レ]節吟味久之曰　是必有神助之耳
【鼓（鼓）】
12 遂擢置高第　云々　補云　此詩用湘灵鼓瑟故事　蓋不忘神
助句也　養按　事文類聚続集廿二曰　杜甫酬
13 高蜀州云　鼓瑟至今悲帝子　注　湘妃尭之女　故曰帝子
傳言湘灵鼓瑟

一〇八
1 前漢書郊祀志上曰　泰帝使素女鼓五十絃瑟　悲　帝禁不止
注　師古曰　泰帝亦謂泰昊也　不止　謂【「帝禁不止」、「止」
左下に挿入符あり、書き入れ「故破其瑟為二十五絃　云々」】
2 不能自正也　恐正ハ止乎　本如此　按史記孝武本紀注　索
隱曰　亦謂大皞　正義曰　泰帝謂太昊【「自正」、「正」左傍に
「止」】

3 伏羲氏
4 毛詩二　終風ハ　衛荘姜傷[レ]己也云々　不[レ]能[レ]
正也　傳云　正猶止也
5 瀟湘　一義云　二十——弾——不[レ]勝——来トヨ
ム時ハ　言ハ　瀟湘ノ佳境ヲフリステヽ　イカニ　卒尓ニ回
トモ我ニ
6 十五絃カケタ　瑟ヲ　和[二]月[一]弾[レ]之　則不[レ]勝
[二]清怨[一]　又南ヘトツテ　カエシテ　可[レ]皈也　此義
本[二]於帰鴈操[一]也
7 一義ニ問荅ノ体ソ　瀟湘ハ　水モ　碧ニ　沙モ明ニ　其レ
ハ　ミモノハ　両岸苔アリ　如[レ]此佳境ヲ　ウチステヽ
此雁ハ
8 何処ヘ回ソト　銭起カ不審シテ問也　二十——弾——
不[レ]勝——来　此点ノ時ハ　三四句ハ　鴈カ荅也　言
9 如[二]起所謂[一]　瀟湘雖[レ]有[二]佳境[一]ナニモシ
ヨウハ　尭ノ女　舜ノ妃ノ娥皇女英ノ　舜ノ巡狩セシ　アト
ヲ　慕テ　湘
10 江ニ　沈シ　其灵魂カ　旧ノ習気カウセイテ　二十五絃ノ
瑟ヲ弾スルホトニ　其清怨ニ　エコラエスシテ　北方ヘ　飛
去也
11 是問荅体也　北ヘ飛去ヲ　飛来ト云ハ何ソ　淵明帰去来辞
ハ　只帰去二字ノ義ニテ　来字ハ　心ナシ　字ノ助也
12 飛来亦此類也　幻謂　用此義不為問荅格　亦可也　却飛
来　ノ点也　蓋推[二]帰鴈之意[一]　如此乎
13 一義木蛇云　二十——弾——不　[レ]勝——却飛来　言

ハ　此瀟湘ヲ去テ　何ソヤ　北ヘ回ト云ヘハ　湘妃ノ瑟ノ清怨

14　ニタエスシテ　如此ト　云　サレトモ　此瀟湘ハ　水ハ鴈所[レ]栖也　沙ハ鴈所宿也　両岸苔　亦不[レ]啄也　コレホトノ　栖_処ハ　アル

15　マイソ　縦是不[レ]勝二十五絃清怨[ニ]　[一]トモ　トツテ反シテ　南方ヘ来レト　挽_留也

16　或云　飛来ハ　毛韻　来_還也　至也　然則飛_還ノ義也　養考之

17　淵云　或云　適　怨　清　和　四曲名也　今用[二]清怨二曲[一]也　風抄　鴈雖北皈　舜崩而後不皈　二妃所恨也

18　桃抄　瀟湘　――東漸点也　等閑ト云ハ　ナケヤリサマナコトソ　ナントモ　不[レ]思ヤウナ心ソ　サルホトニ　人ニ無[二]等閑[一]ト云ハ

19　大切ニ　スル事也　又云　等閑ハ　説話也　閑ハイタツラトヨム字也　等[レ]閑　ト云歟　飛来　点　言　銭起弾[レ]瑟雁去

20　一ト怨ミ怨ムルホトナラハ　イカナル鴈ナリトモ　面白サニ　タエカ子テ　又可飛来也

21　不[レ]勝――　村講云　銭起在瀟湘作　則飛来之来　字難[レ]會　雖然荘子人間世云　子其有以語　[レ]我

22　来　希逸注　子其有[二]以語[レ][一]我　謂何以教我也　来　助語也　今飛来　々亦語助也　続翠亦云　如[二]皈去来之[一]

23　来[一]　云々　或説云　此詩在[二]瀟湘以北[一]作也　言自[レ]瀟湘飛_来也　然則　来_字非[二]語助[一]也　天隠注詩人發興之言

一〇九

1　トハ　詩人ハアルマシキ理ヲ　云出カ　發興也

2　村又云　玉屑有古人詩云　老僧只恐山移去　日午猶未開寺門　是亦其類也

3　幻考　才子傳　無銭到瀟湘之事　然則此篇瀟湘以北作歟　来　字亦易[レ]會

4　唐音遺響作薛大拙詩　唐詩正音作銭仲文詩即銭起也【「大拙」右傍に「能也」。「薛大拙」即ち「薛能」の意】

5　二十五絃　漢書郊祀　養按　荘子人間世曰　雖[レ]然若　必有[レ]以也　嘗　以語[レ]我来　疏　嘗試也　汝之化道　雖[二]復【「以也」左傍に「テスルコト」】

6　未[レ]弘[二]　既欲[二]請行[一]　必有[レ]所_以試　陳汝_意告_語[レ]我　来

7　張楷和皈鴈云　江南春好忽言回　柳緑莎青水似苔　毎恨不来々却去　莫因長去々还来

8　子安和云　春風北去朔風回　飲啄江湖宿浅苔　南向[二]■柯[一]繒弋密　衡山高処早皈来【「戕」某字見せ消、左傍に「[二]」】【「■柯」左傍に書き入れ「玉篇云　[一]子郎切槃□大戈也　又[二]柯郡亦作牂　[二]各何切[一]柯即[一]柯　玉篇戈□　戕在哀七郎二切　残也殺也　[三]各何切戮也　牂柯玉篇初云五音□歌蜀江名」とある】【[二]「月*弋」、[二]「可*弋」、[三]「可*戈」】【□（部）】

一一〇

1 賈島　新唐列傳一百一韓愈傳附之　才子傳島字閬仙　新唐書列傳并十七史作浪仙【この行までに張籍「逢賈島」詩原典テキストが置かれている】

2 類説　賈島嘗為僧　洛陽令不許僧午後出寺　島詩曰　不如牛与羊　猶得日暮帰

3 韓愈惜其才　俾反俗　應挙　貽詩曰　孟郊死葬北邙山　日月風光暫等閑　天恐文章声断絶

4 曰留賈島在人間

5 幻按　才子傳　賈島字閬仙　范陽人也　初　連敗[レ]文場　囊篋空甚　遂為[レ]浮屠　名無本　来東都旋往　京

6 居青竜寺　時禁僧午後不得出　為詩自傷　云々

7 補云　才子傳　後復乗閑策蹇　訪李餘幽居　得句云　鳥宿池中樹　僧推月下門云々　又欲作僧敲　煉

8 之未定　吟哦引手作推敲之勢　傍観亦訝　時韓退之尹京兆　車騎方出　不覚衝　至第三節　左右擁

9 到馬前　島具實對　未定推敲　神遊象外　韓駐久之曰　敲字佳　遂並轡皈　共論[レ]詩道　結為布衣交

一一一

1 遂授以文法　去浮屠挙進士　愈贈詩云　孟郊――日月風□頓覚閑　天恐――渾断絶　再生――【□「白+云」（雲）】

2 自此名着　時新及第　寓居[二]法乾無可精舎[一]　姚合王建張籍雍陶　皆琴樽之好　云々

3 張籍　新唐書韓愈傳附之　中唐末晩唐初　養按　履歴曰　張籍字文昌　和州烏江人　登進士第

4 韓愈薦為国子博士　歴水部主客郎中　終國子司業【博（博）】

5 僧房　云々二句　言賈島初為浮屠　居青竜寺　触其目者欵冬花而已　今去浮居毎吟行至于日【「僧房」右傍に「雪本」】【「浮居」、「居」右傍に「屠□」】

6 斜也　案　唐書一百一云　島字浪仙范陽人　初為浮屠来東都　時洛陽令禁云々　愈憐之　因教其為

7 文　遂去浮屠挙進士　愚謂　拠此傳解第二句　則注未加冠巾時作　非歟　雖然如注以日斜比時昏　則

8 与傳反　又案　張籍有与賈島閑遊詩云　水北源南草色新雪消風暖不生塵　城中車馬應無

9 数　能解閑行有幾人　以此詩并案　則注亦是矣　雪本

10 僧房云々　或曰　此詩比岑參尋永安詔云　満寺枇杷冬著花老僧相見具袈裟　詩之格指謂時

11 節也　不必以欵冬花比島也　愚按　欵冬花一名虎鬚　一名菟奚　図経云　十二月開花青紫蕚　去土一二

12 寸　初出如菊花蕚　又衍義曰　欵冬花百草中　不顧氷雪最先春世　又謂之鑽凍　又案　張楷和【菊（菊）】

13 唐音逢賈島詩曰　緩促吟鞭数落花　東風吹柳万條斜　旧時燕子皆零落　何処■池亭問謝家【某字書きかけ、見せ消】

14 此詩亦末二句如所指也　雪本

15 僧房――逢著二字　不期而逢也　与[二]邂逅[一]同也　村云　第一句ノ　ツクリヤウ　猟狂也　ヲリシモ　欵冬花ノ　サイテアル時ニ

16 逢賈島也　九淵曰　欵冬花在厳冬霜雪中　凌寒開花　譬

之島処衰俗中而有君子節也　旧聞

17　其説未信之　今按巌子安和此詩云　寒梅孤放雪中花　蓋比賈島於寒梅也　於是始信旧講【蓋（蓋）】

18　桃抄云　一義　島初為僧後还俗　一義　島初為俗後為僧也　第一句ハ　天隠ノ心ハ　島カマタ　僧ニテ　寒疎【还（還）】

19　寂寞ニ　堪ヲ比欵冬花也　第二句ハ　賈島ニ　逢テ　イトマコイシテ　寺ヲ出テ　吟行スレハ　ハヤ日カ　暮也　十二街ハ

20　車十二両　ナラフルホトノ　路ノヒロサソ　日本ハ京モ　東洞院ノ小路（ショウヂ）カ　御幸路テ　サアルト云ソ　此雪中ニハ　馬ニ【両（輌）】

21　騎テ　誰処ヘ　イツタラハ　ヨウヲリサウタト　云ワウソ　更ニヲホヘヌソ　張籍世ニ　無[レ]知音　不[レ]言而可知

22　或義云　賈島还俗ノ後ト見ニハ　張籍逢賈島ニ心ニ　思フヤウハ　アラ無益ヤ　島只僧テ　ヲルヘキカ

一一二

1　何用ソ　还俗シテ　今ノ天下ノ　クラキ時分ニ　誰引出テ　可[レ]用ソ　只引篭テ　居ヨ　カシト　云心ニテ　見レハ入誰

2　家三字有味也　此ハ題ニ　逢賈島トアルニ　ヨリテ　云ソ　僧ノ時ナラハ　逢[二]無本[一]ト　題ニ可書ソ　是モ理

3　アリ　ナレトモ　事ヲ追ヲ　書スル時ハ　以前ノ事ヲ書ニ　後ノ謚号ヲ　書ルス例定タル事也　天子名ヲ　某帝【「追ヲ」、「ヲ」見せ消、右傍に「テ」。「追テ」にすべき。】

4　某宗ト云ハ　皆崩シテ　後ニ　定タル謚ソ　欧陽文忠公　司馬文正公　東坡文忠公　王荊文公　皆此類也

5　小補云　僧房指法乾無可精舎也　詩意与同注　幻謂　賈島　張籍相共吟行　三四句　両人無所托也【「与」「同」間に挿入符あり、「注」右傍に顛倒符ある。「与注同」にすべき。】

6　僧房――續翠云　逢著於欵冬花也　山谷十九　夢蝶真人貌　黄槁　籬落逢花須酔倒之類也

7　聴雨義云　始於僧房　与島相逢　寒寂雖難忍　風流可愛焉　其後島还俗　出寺吟行　年已衰老　日【「義云」右傍書き入れ「一之句」】【「其後」右傍書き入れ「二之句」】

8　薄（セツル）西山　不如僧之可愛也　只今相逢　則十二■街中春雪遍　雖[二]長安十万家[一]　無[レ]路[レ]求[レ]官　可悲哉　実有諷島意【「只今」右傍書き入れ「三之句」】【「官」「可」間に挿入符あり、左傍に「位」。「官位」にすべき。】【「意」後に挿入符あり、左傍に「也」。「意也」にすべき。】

9　一説曰　島為僧時　相逢共吟行　実可[レ]愛焉　今日島还俗　走[二]馬於十二街[一]　大似ハ鹿俗也

10　信仲云　張籍甚悪釈老　勧[レ]韓愈欲[レ]廃[レ]之事　見韓文十四荅張籍書　然■則聴雨義不可歟【「信」右上に書き入れ「篤」。「篤信仲」にすべき。】【「然」見せ消】

11　村云　此詩亦有二義　一義全蒲謂賈島為僧時也　欵冬花開時　僧房ニ相逢エハ　賈島ハ出[レ]寺（ヲ）

12　□□□　ヤラ　日暮ルニ　吟シテ　行也　三四句ハ　出寺行トモ　サシタル　邏斎（ロサイ）モ　アルマイソ　如註ニ　比シテ可見也

13 吟行八　如屈原行吟澤畔也　一義　一二謂為僧時　三四句　謂述俗後　非也

14 唐詩正音載張文昌逢賈島詩　其次　有与賈島閑遊詩云　水北原南草色新　雪消風暖不生塵　城中　車馬應無数　能解閑行有幾人　幻謂　二首同時作乎　詩意相類

15

16 華本　唐詩正音　岑參赴嘉州過城固縣尋永安超禪師房詩云　満寺枇杷冬著花　云々　村云　續翠有云

17 蕉堅引岑詩為同一句法　村云　一ノ句　李白両人對酌山花開之類也　四字三字句法也

18 雪春　注　文選二十九張平子四愁詩序　屈原以[一]美人[一]為[レ]君子　以[一]珎宝[ヲ][一]為仁義[ト]　以[一]水深雪零[ヲ][一]為[ス][一]小人[ト][一]　思以道術[ヲ]【「春」右傍に転倒符ある。「春雪」にすべき。】【珎（珍）】

19 相報　貽[ムクイ]　[一]於時　君[ニ][一]　而　懼[シテ][ツ][三]讒邪不[サランシテ]　[一]得[レ][一]以通　[一]銑曰　懼不得通此意也　幻謂　此注　所引　甚參差　蓋取其義耳

20 十二街　帝都四方　各有三門　其路透関矣　一方有三門三道則四面十二門也

21 十二街　班孟堅西都賦　披[ヒライ][一]三條之廣路[ヲ][一]　立[タリ][一]十二之通門[ヲ][一]　鄭玄曰　天子十二門　通十二子也　銑曰　披　開也　三條三

一一三

1 達之路　面三門　四面十二門

2 文選第二張平子西京賦　旁開[カタカタ][テ][一][二]三門[ヲ][一]　參塗[ミツノミチ]　夷[タイラカニ]　庭[タイラカニ][ヘンシテ]　方[レ]軌[ナラヘタルコトアトヲ]　十二[ニンシテ]　街衢相_経[タリ]　云々　薛綜曰　街　大道也　経

3 歴也　一門面三門　々三道　故云　參塗　々容四軌　故方十二軌　々車轍也　夷平也　庭猶正也　善■曰【「一門」、「門」右傍に「ヒ」。「一面三門」にすべき。】【■「四」見せ消】

4 方九軌之塗　凡有十二也　周礼曰　営國方三門　鄭玄儀礼注曰　方併也　周礼曰　國中営途九軌

5 西都賦曰　立十二之通門　済曰　西京城面三門　々三道皆平正　可斉列十二車　其中街衢　互

6 相経渉

7 和云　寒梅孤放ヨ中花　素質清香映月斜　不与群芳争艶麗一枝閑傍野人家　子安【ヨ（雪）】

一一四

1 西魏主寶炬殂　謚曰文皇帝　朮子欽立候　景自立為漢王廢梁王弑之　尸位不及三年改元者　一日大口景立豫章王棟已而簒位　先是始興　郡屬廣東　今韶州府　太守

2 陳霸先起兵討景　湘東王遣王僧辯討景　簒数月而為僧辯霸先所敗　亡走呉　欲入海　為其下口所斬　送尸建康　傳首江陵　截其手足　送於口口

3 湘東王立　是為元皇帝　十八史【この頁は三行のみで、原典のどこについての抄か不明】

一一五

1 杜牧 晩唐 新唐書列傳九十一 杜佑傳附之【「佑」右傍書き入れ「佑 于究切 助也 玉篇」】【本頁この行までに杜牧「江南春」詩原典テキストが置かれている】

2 本集云 江南道中春望 杜牧赴宣州 沈傳師幙府時作也【「傳」右傍書き入れ「見漁隱叢話杜牧章」】【幙（幕）】

3 雪本 珊瑚詩話 百川学海己集中 珊瑚鈎詩話巻第二 杜牧詩云 南朝四百八十寺 多少楼臺

4 烟中 帝王所都 而四百八十寺 當時已為多 而詩人侈其楼閣殿臺焉 近世二浙福建諸州寺【「烟中」は「烟雨中」にすべき。一一六13、一一六14に「烟雨中」が見える】【「侈」について、一一五2に小文字書きで書き入れ「侈 昌是切 泰也 ヲコル」】

5 院至千區 福州千八百區 秔稻粢麻 連亘阡陌 而游隋之民 竄藉其間者十九非為落髮修【「隋」について、一一五7に小文字書きで書き入れ「隋 徒果切 落也 懈也」】【粢（桑）】

6 行也 避老差役為私計耳 以故居積貨財貪■毒酒色 鬬毆争訟 公然為之 而弊未有【「老」右傍に「ヒ」。「避差役」にすべき。】【■「毒」墨汚れ、見せ消】【「毆」左傍書き入れ「毆於口反 擊捶打也 玉篇」】

7 過而問者 有識之士 毎嘆息於此

8 千里 淵云 続翌云 千里鶯啼四字 難連而連 是妙処也

千里之間 鶯啼ハ 何ソヤ 譬ハ 白河ヲ

9 南ヘ行ク人ノ 鶯啼ヲ聞ニ 白河ノヤフニモ啼キ 今熊野伏見宇治ニモ啼キ 河内紀州村々里々

9 啼連ハ 二月三春ノ ヒニナル時ソ【「二」「月」間に挿入符あり、「三」右傍に転倒符ある。「二三月」にすべき。】

10 南朝 淵云 三四句言ハ 杜牧ハ 第一文才盛ナルホトニ 天子ニモ賞翫セラレテ 禄位共高シテ 可在朝廷ト 思タ

11 レハ 赴[二]宣州[一]ホトニ 万事不如意也 續翌講云 時節境致モ面白ケレトモ 看マワスモ 例ノイヤナ僧

12 寺ハカリテ 無興也 京ニテ アラウニハ サコソ面白カラウスラウト也 是杜牧平生愛[二]女色[一]之謂也 補義同之

一一六

1 淵云 一二ノ句ハ イカニモ 春ノ サカリ 面白ク 酒モ 処ニ アレトモ 三四句ハ 氣ニ アワヌ 僧寺多イ 処エ キタト云心也

2 瞻民カ 前用後体格ト云ハ ユワレ■ソ 桃云 千里ト云ヘハ ドコモ 春ニ ナツテ 鶯啼ワタリ 花サキ 乱テ【「ヌ」見せ消、右傍に「タ」。「ユワレタソ」にすべき。】

3 山川共ニ サヽメク也 酒旗ニ 無尽ノ 字カ イテ 人ニ ヨマセテ 其ヲ 読トテ 徘徊スルホトニ 買酒飲也

4 日本ノ茶店ニ 昼トモ カイテ ヲクト 同事ソ 旗ニ カク字トモヲ 云イ傳レトモ 本拠ナキ事 チヤホトニ ■【「無」某字書きかけ、見せ消】

5 無用也 南朝――東晋後 天下二分為南朝北朝也

南朝 宋斉梁陳四代也 北朝 後魏

6 東魏西魏北魏後五代也 三四句 謂其風景美也 杜牧カ イツモノ心ハ 寺ニテ 僧ト遊ハ 散々ノ【「後」「五」間に

挿入符あり、右傍に「周」。「後周」にすべき。】

7　事ト思也　今日鬢絲禪榻畔ト作モ　是也　杜牧ハ　僧ヲ悪也　山中ニテ　僧ニ　知[レ]吾カト　問ヘハ　不知ト

8　云処ニテ　僧ハ殊勝ナル者トテ　信向スル也

9　江南春　雑説三十九　聖宋掇遺冠準方年少　得[レ]意偶撰[二]江南曲[一]　有江南春尽離腸断　蘋満【「掇」について、一一六8に書き入れ「掇　タツ　ウツ　猪劣切　都括切　拾也」】

10　汀洲人未帰　日莫江南一望時　愁情不断如春水　之類也意皆慘悽　末年果南迁【「慘悽」左傍に「カナシム也」】

11　村講　江南春　有曲名　酒名之義　観中為酒名　桃云　土窟春　石凍春　焼春　麴米春　松醪春　抛

12　青春　皆酒名也　江南春亦酒名也ノ義アリ　其時ハ　一ノ句ハ　春ノ面白ソ　酒ノミツベシイコロ也　第二句

13　□□方多酒也　四百八十寺モ　酔テ　烟雨中ト　濛々トミナイタソ　幻謂　九淵義同之　村講一義用之

14　□□以江南春為酒名　只言酔眼朦朧　以多少寺楼為烟雨中也

15　風抄梅謂　鶯已求友　出幽迁喬　牧今途中無伴　況出朝迁野　自恨不如鶯也　緑映紅三字　有

16　時移物換之嘆　村云　吾朝鶯非彼邦所謂也　此婆餅焦也蓋方彼鶯大也【「謂」「也」間に挿入符あり、左傍に「鶯」。「所謂鶯也」にすべき。】【「蓋」「方」間に挿入符あり、「彼」右傍に転倒符ある。「蓋彼方」にすべき。】

17　村云　江南春　樊川集題云　江南道中春望可也　詩意恰好

18　村講云　続翠ノ義ニ　上ヘハ　述春望之景　下ノ心ハ　杜牧有才不被用シテ　人ノ幕下ニ　居ホトニ　腹立シテ　云ソ【「幕下」右傍書き入れ「牛僧儒　鉄叟云々　未見拠」】

19　酒ウチ飲テ　寺ニ遊テ　可一生也　此義可也【「可」「一」間に挿入符あり、右傍に「送」。「可送一生」にすべき。】

20　又一義　六朝全盛之昔ハ　四百八十寺アリシモ　今日六朝亡スレハ　水村山郭ニナルマテ也ソ【「也」右傍に「ヒ」印ある。「マテソ」にすべき。】

21　抄　愚　應永庚寅　従国信置寺院之在江南一方者山使密師堅中唐僧　来方日本　會通政趙氏杭之布政【「置」以下十一字　墨消】

22　司語偶及此詩　趙曰　四百八十寺　唯謂杭之一州耳　凡南朝六代所置寺院之在江南一方者　豈唯

23　四百八十而已哉　聽之席次　信而記焉　村講云　是仰之義也　ホナイホナイ　泰仰之自侍者耆旧住万壽　有作者名　南

一一七

1　禅寺帰雲僧也

2　抄云　紅緑間色　比小人也　鶯亦比小人也

3　八十　蔡寛夫詩話云　詩人用事有乗語意到処　輒従其方言為之者　亦自一体　但不可為■耳　呉人以【「常」某字墨汚れ見せ消、右傍に「常」。「為常耳」にすべき。】

4　作為佐音　淮楚間以十為忱音　白楽天三月三日閑行云　黄鸝巷口鶯将語　鳥鵲河頭水欲消　緑【「音」「白」間に挿入符見えるが、挿入内容が見当たらない】【「水」右傍に「ヒ　氷

歟】

5 浪東西南北水　紅欄三百六十橋　十字作忱音　白氏集自注
黄鸝坊名　鳥鵲河名

6 詩林廣記□□□□□□□□　漁隱六作九　漁隱前集
二十一

7 紅欄三百――白氏集注　蘇之官橋大数　六十　勝覽六作九
詩林廣記注作六　白氏文集作九

8 許渾金谷園詩　二十四友一朝尽　愛妾墜楼何足言　丁卯集
元朝　張南皐贈丹士詩云　天地

9 炉中有太丹　朝飛海暮西山　一年三百六十粒　粒々軽抛去
不還【「飛」「海」間に挿入符あり、右傍に「東」。「朝飛東海」にすべき。】

10 東坡虔州八境図詩　却従塵外望塵中　無限楼臺烟雨中【「烟雨中」、「中」右傍に「ヒ　朦」。「烟雨朦」にすべき。】

11 雪本　清明詩　清明時節雨紛々　路上行人欲断魂　借問酒
家何処有　牧童遥指杏花村　潘湖隱

12 孤山喚渡詩　吟傍蘇堤欲暮天　孤山影裡喚帰船　旁人問我
詩成未　思在断橋烟柳辺　東坡乞會

13 稽詩　乞郡三章字半斜　庶堂伝咲眼昏花　上人問我遅留意
待賜頭綱八餅茶　又南来北去

14 幾時帰　倦鳥孤■雲豈有期　断送一生消底物　三年光景六
菰詩【「雲」某字墨汚れ、見せ消】

15 昔摂政殿對夢岩和尚求三体詩中第一詩　即荅此江南春　輒
求以新今中第一之歌　荅以源【「春」「輒」間に挿入符あり、右傍に「詩」。「江南春詩」にすべき。】

16 倶親詠　ナニハカタ　カスマヌ浪モ　カスミケリ　ウツル
モクモル　ヲホロ月夜ニ

17 和云　処々深紅間浅紅　柳揺新緑鳥呼風　昼楼十二軽烟外
人在繁華罨画中　子安【罨（影）】

18 千里云々　此詩杜牧赴宣州時之作也　全菰言千里処々鶯花
成無界　苟此時在長見花聞鶯　則【「長」「見」間に挿入符あり、右傍に「安」。「在長安」にすべき。】

19 可也　然今在水村山郭之作也全菰間　所見者　南朝古寺而
已　案　本集題云　江南道中春望　天英【「作也全菰」四字墨消】

20 用此題為是矣　案　唐詩四十五陸亀蒙春思二首　詩云　竹
外麦烟愁漠々　短翅啼禽飛魄々

一一八

1 此時憶着千里人　独坐頤支看花落　江南酒熟清明天　高々
緑旆當風懸　誰家無事少年子　満【「着」右傍に「者歟」か。「者歟」二字見せ消】【「坐」「頤」間に挿入符あり、「支」右傍に転倒符ある。「独坐支頤」にすべき。】

2 面落花猶酔眠　由此視之　春望題似是也　然唐音乃江南春
色張御史和云　満川啼鳥怨残

3 紅　水郭春園柳絮風　春雨一番江水濶　草痕将緑到呉中
雪本

4 酒旗銘云　日辺有寺時ノ　千八口玉程ニ　両人上木来レ　七
山相並[レ]此ニ　十月半斜有　火焼羊脚[レ]美　水辺有鳥

5 酒　蓋以青白布書之　又銘云　七亡相近　十月双全　火焼

羊脚　水注鶏辺　雪木

6　已上共三首　右三首第三句有十之字謂之者乎

一二一

【この頁に杜牧「江南春」詩の第一句より第四句「多少楼」を写している。抄文が置かれていない。】

〈異体字一覧〉（　）に通行体を入れた。なお、【　】において*印と†印で記すものを掲げない。また、操作困難なため、一部ユニコードには文字がないものも割愛した。

回（因）　罨（影）　悅（悦）　淵（淵）　華（華）　盖（蓋）
还（還）　弃（棄）　亰（京）　皷（鼓）　雜（雑）　參（参）
殘（残）　将（将）　戝（職）　珎（珍）　翠（翠）　續（続）
ヨ（雪）　節（節）　嘗（嘗）　荅（答）　遲（遅）　慱（博）
范（範）　冨（富）　卩（部）　并（並）　辺（辺）　蕭（篇）
幙（幕）　刈（劉）　蠟（蝋）　匊（菊）花　　隋（隋）
大業　　鳳皇（凰）

〈付記〉本稿は二〇一一年度中華人民共和国教育部人文社会科学研究一般項目（規划基金項目 11YJA751047）「日本五山僧的抄物『三体詩幻雲抄』中汉籍征引状况与室町时代的汉籍流布研究」の研究成果の一部とする。

リュウ レイ／北京師範大学外国語言文学学院　副教授